

---

# ワードの箱～黒船異聞～

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウォードの箱〜黒船異聞〜

### 【Nコード】

N5332F

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

黒船来航。第一回目の来航を終え琉球に滞在するペリー艦隊。そのペリー艦隊に“植物学者”の肩書で以て乗船しているモローはある日ひょんなことから写真技師のブラウン、絵描きのハイネ、通訳のウィリアムズと出会う。その出会いも束の間、ペリー艦隊は予定を切り上げて、船の舳先を“極東の島国”に向けた……。

母国に無かった湿気が、モローの集中力を削ぐ。

きつと、さんご礁の欠片で形成されたであろう砂浜を踏みしめながら、筒を切り詰めたショットガンを構える。波の音は母国のそれとは変わらなかったが、1月だというのに暖かいこの地方の陽気が、遠くまで来たのだな、という感傷を彼に突きつける。けれど、そんな雑念をとりあえず捨て置いて、ショットガンの目星を合わせる。

目星の先には、鳥が浮かんでいた。距離は、約5フィート。丁度、ショットガンの有効射程内にいる。母国・アメリカ合衆国にはいない鳥だ。まるで、モローに撃たれるのを望むように、銃口の5フィート先を、ふわふわと舞っている。いや、待っている。

引き金を、ゆっくり引いた。

ドン、という音に一瞬遅れ、その鳥はその場に落ちた。さっきまで張り詰めていた緊張感を、息と一緒に吐き出したモローは、おもむろにショットガンの構えを解いた。砂浜に、さっきまで浮かんでいた鳥が落ちた。

フヒュウ。

モローの後ろで、口笛の音が聞こえた。クールな仕事をした人間に浴びせる類の口笛だ。

「へえ、やるねえ」

口笛の主は、英語でモローに話しかける。モローは、思わず振り返る。

モローの後ろにいたのは、大男だった。

見た目、40歳代。無襟のシャツの裾をたくし上げ、汚れた作業パンツを履いている。だが、その服は、その男の屈強な体を隠してはいなかった。パツと見た感じは船の甲板員か、あるいは位の低い水兵のようないでたちだ。けれど、そんな彼に印象的だったのは、まるでイタリーの彫刻のような癖のある、茶色の髪だった。

モローは答えた。

「それは皮肉か？ ショットガンというのは、そもそも鳥を仕留めやすいように散弾が飛んで命中率が上がる仕組みなんだが」

「バレたか」。その男は大仰に笑った。「少なくとも俺だったら、あんなトロい鳥、狙ったらすぐ、ドン、だ」

男は、銃を構えるフリをした。

そんな男に構わず、モローは落ちた鳥を拾おうと、鳥の前まで歩を進める。

「おいおい、無視するなよ」

粗野な口調で言葉を投げつけつつ、モローの後を追う男。モローは反論した。

「無視はしていない。ただ、私はあまり、無駄な口を叩くのが好きではないんだ」

「無駄な口、ねえ」

バツが悪そうに、男は言いよんどってしまった。

そんなことに構わず、モローは足元で息絶える鳥を観察する。

一目見て、その鳥がどういう種に属するものか分からなかった。

3フィートはありそうな長い羽。そして、ピンクがかった白い体に黄色い嘴。どういう鳥なのか、よく分からなかった。

「へえ、見たことない鳥だな」

男も、不思議そうにその鳥の屍骸を見下ろす。

その鳥には、無数の傷があった。もちろん、さっき散弾を食らったできたものだが、その傷から赤い血が流れ、白い砂浜に染みこんでいく。確実に腐敗に向かいつつあるにも関わらず、その鳥の羽毛は恐ろしくも美しかった。

「私も見たことがない鳥だ。だから、こうして撃つてみた」

「で、どうするんだ？ 食べるのか？」

男の問いに、モローは笑った。

「ははは、馬鹿を言え！ 寄生虫がいるかもしれないものを、わざわざ食べるようなことはしないさ」

男は、少し気を害したらしい。男は不機嫌な顔を隠さず、モローに問う。

「じゃあ、なぜ撃った？」

男の問いに、モローは少し言いよんだ。まるで、何か深くものを考えているかのよう。けれど、彼が紡ぎだした言葉は、非常にシンプルだった。

「それが、私の仕事だからだ」

「仕事？ 無益に生き物を殺すのが仕事？」

「無益じゃない。私がしているのは、学術的な調査だ。そして、私は学術的調査のために活動している者だ」

ジェイムス・モローは今、「農学者」という肩書きで以って此処にいる。

元々は医者の学位を持っていたモローだったのだが、専門である医学のほかに、剥製作りの知識や植物に関する知識も豊富だったという変り種だった。特に、作物に関する知識や農具に関する知識は、大学でも卓越したものがあつた。そんな彼のことをどこで聞きつけたのだらう、本国のアメリカ政府から、ある勧誘があつた。

< 極東の使節団に参加されたし >

そういつた一文からはじまる文章だった。要約すれば、アメリカは近く、捕鯨船の停泊できる港を確保するため、極東の島国に使節を送ることになっていて、その使節団に、学術的な調査の出来る船員を募集している旨が書かれていた。学術的な調査、とは、上陸した地点の動植物の調査やその標本の収集、有用と思われる動植物の収集などのことを指した。当時、外交使節に限らず、遠征や戦争などという場面において非戦闘員である学者を連れて行くのはそれほど突飛な話ではない。事実、かのナポレオンなどはエジプト遠征の折、多くの学者を連れていったという。

だが、離れて見れば突飛でないことでも、話が降りかかった本人にすれば突飛極まりない話である。極東の島国。当時、ヨーロッパ世界から見た極東は、世界の果てであつた。世界の袋小路であり、

世界のドンつまりであった。無論、ヨーロッパ世界の常識は通じないし、そもそも航海に危険は付き物だった。そんな死地に、自分が赴くべきか否か、悩まないはずはない。けれど、給金は弾むというし、それに待遇も良さそうだった。それ以上に、異国には常にチャンスが隠されている。商才があれば金の、学才があれば名誉の種が落ちている。

そう踏ん切りをつけたモローは、アメリカ海軍ペリー提督率いる外交使節団に、「農学者」という肩書きで以って乗り込んだのであった。

「学術的調査、ねえ」

男は、まるで揶揄するかのような口調でそう呟いた。さすがにモローも捨て置けなかったのか、口を尖らせた。

「では、あなたは何のために艦隊に乗船しているのだ？」

「あ？ 俺か？ 俺は金を稼ぐためだ。こつという単身赴任は儲かるからな」

あまりにあけっぴろげに語る男の口調に、モローは笑った。

「ならば、私とあなたは、あまり大差ないよ」

「なんだと？」

「あなたは金のため、私は名誉のため。けれど、どちらも自分のため、つていう点では同じだろう？」

モローの言葉に、しばらくぼけっとした顔を見せたまま、男は固まっていた。まるで、モローの言葉の意味が取れないかのように。けれど、そのうち口角をひくひくと上げ始め、ついには大口を開けて笑い出した。

「はっはっは、アンタ、面白えやつだな！」

笑う男を横目に、モローは鳥の屍骸の首を持ち、ぐいっと引き上げた。

「で、その鳥、どうするんだ？」

笑いを抑えつつ男が聞くと、モローは答えた。

「あ、ああ……、剥製にするつもりだ。で、本国の動物学者に報告

して、新種かどうかを判断してもらおう」

「つてことは」男は言った。「挿絵とか、必要なんじゃないか？」

「よく知っているな」と、モロー。「やはり、剥製だけでは分からないから、報告書をまとめている。つまりは、文章で描写しているわけだ。本来なら挿絵があればいいんだが、私は絵が下手でな」

「なら、いい絵描きを知ってるが？」

「ほ、本当か？」

モローの瞳が輝いた。その様を男は見逃さなかった。

「おうよ、俺の同僚だからな」

「けれど、平気か？」モローは訊く。「その絵描きとやら、仕事があるのではないか？ 停泊中とはいえ、船の任務があるのではないか？」

モローのこの心配は、当時の船事情に深く関わっている心配である。

当時の船は、良ければ蒸気船、運が悪ければ帆船だった時代である。この時代の船というのは、現代と比してその稼働に多くの人力を必要とした。帆船であれば帆の向きを変えたり畳んだり揚げたり、つまりは何から何までを人力でこなしていたわけだ。それは蒸気船であっても事情は変わらない。蒸気機関を稼働させるときでも、コークスを運ぶ作業、それを炉にくべる作業はあくまで人力なのだ。

なので、当時、軍船に乗る人間には、所属する船と、その“任所”が定められていた。任所、というのは、つまりは船における役割のことである。あるものは甲板作業の任所につき、あるものは蒸気船稼働部の任所につく。軍船であれば甲板戦闘員としての任所もあるし、砲操作の任所もある。任所についた乗組員には、いつも大抵仕事があるのだ。

だから、その“絵描き”は任務があるのではないかとモローは訊いたのだ。なお、そう訊くモローには“任所”がない。と、いうのも、彼の役割が、「動植物の収集」という特殊な任務であるために、“任所”を免除されているのである。

だが、男は首を横に振った。

「あ？ 大丈夫だよ。ソイツは、ま、俺もだけど、任所を免除  
されているから」

その言葉に、モローは耳を疑った。

その絵描きが無任所乗員であることもそうだが、それ以上に、今眼の前にいる男が無任所乗員である、という事実には驚いているのだ。そもそも、無任所乗員というのは、特権的な措置である。操船時に何の賦役も負わない乗員など、客船でもない限りいない。例えば、この使節のトップであるペリー提督だって、“総司令官”という任所があるくらいなのだから。つまり、眼の前にいる男もその絵描きも、モローと同じように、特殊な任務についているということだ。

驚きを隠せない、といった顔で立ち尽くすモロー。その表情を汲み取った男は、唇を伸ばした。

「なんだなんだ！ まるで、俺が無任所乗員なのが信じられない、って面だな！ まったく、失礼なヤツだな！」

いや、それはしようがあるまい。

そもそも、モローの眼の前で不機嫌そうに顔をしかめる男のいでたちが、まさに“海の男”だからいけないのだ。まるで、鹿の太もものように太い二の腕。まるで馬のように発達している胸の筋肉。そして、大木のように太い首。しかも、豪放磊落な笑顔。それは、甲板で帆船の帆を張る、作業員のそれだからだ。

だが、男は不機嫌そうに続ける。

「まったく、アンタと一緒になんだよ、モローさんよ」

「な、なぜ、私の名前を？」

名乗ってもいないのに、自分の名前を知られている、という事実には少々驚くモロー。男は頭を掻きながら続ける。

「あのなあ、無任所乗員って、すごく珍しいんだぞ？ たしか、今回の使節団には3人しかいないんだ。で、自分がその3人のうちの1角なんだから、そりゃ気になるだろう？」

「なるほど。“お仲間”を探していたわけだ」

モローの言葉に、男は頷いた。

「おうよ。無任所乗員っていうのは、肩身が狭いからな。同じ仲間同士、仲良くしたいじゃねえか」

モローは笑った。男とは違い、密やかに笑った。

「ああ、確かに。肩身は狭いな。……一つ、訊いていいか」

「なんだ？」

モローは訊いた。

「あなたのお名前をまだ聞いていなかった。それに、あなたはどのような任務を帯びているのだ？」

すると、男はその質問に答えた。

「俺は、エリファレット・ブラウン・ジュニア。ブラウンとでも呼んでくれ。俺は、銀板写真の撮影技師だ」

そして、例の絵描きのところ连接到ってやるよ、とブラウンは言った。

ブラウンは、モローを連れ、上陸している島の内部に向かっていった。確か、測量技師の報告では、この先には原住民の村があるはずだったな、となんとなく島の地理を思い出すモローの先を、ブラウンは巨体を揺らしながら進む。

この島は、熱帯、あるいは亜熱帯の植物相だった。

道の両端にソテツやシダ類など、温暖な所に見られる植物が繁茂して、行く先の視界を奪っている。ふと空を眺めると、太陽が強く輝いていた。今は二月だというのに、なんとこの島は暑いことか、とモローは噴き出る汗をぐいと拭いた。モローの手に首を握られている鳥が、ざまあみる、と言わんばかりに頭を垂れていた。

そして、しばらく歩くと、ようやく視界が開けた。

きつと、もともと丘のように開けたところだったのだろう。そこに、東洋にありがちな、漆喰で壁を形作られた建物が、いくつもいくつも並んでいた。四角く、かつ少し湾曲のあるタイルのようなものが、積み重なるようにして屋根の上に重ねられていた。アレはなんだ？ と訊くと、ブラウンは「あ、確か、こっちの言葉で“ka

Warra”つていうらしいぞ」と教えてくれた。

ブラウンは、そんな白い壁の家をすり抜け、やがてある家の前に立った。他の家とは違い、屋根に雑草がぼつぼつと生い茂り、壁は半ば崩れてしまっているかのように見える。門の上には、獅子のような、猫のような、あるいはその二者を混合したような、不思議な動物を象った陶器が一對乗っかっていた。門を通るものに睨みを利かせているらしく、門を通るモローとその“獅子”は、ある一点で目が合った。訝しげにその“獅子”を眺めるモローに、先を歩くブラウンは「ああ、それは魔よけらしいぞ」と、笑った。

そんな“獅子”に怯えつつ門をくぐり、そしてドアを開けると、中には当然部屋があった。けれど、それは外観とは似ても似つかない光景だった。

外を見た感じでは、明らかに東洋的な建築物だったその家だが、その中は明らかにアメリカの調度で満たされていた。部屋の壁や床から始まり、中にある机や椅子、本類など、その全てがアメリカ式に整えられていた。この地域特有の、蒸した空気以外、この空間はまさにアメリカだった。

「どうだい？ 俺たちの隠れ家は？」

「か、隠れ家？」

“隠れ家”という、あまりに子供っぽいブラウンの言葉選びに、モローは思わず噴き出してしまった。そのモローの様子に、ちよつとブラウンは気分を害したらしかった。

「でもよ、これを、隠れ家と言わずして何とさえいいんだ？ この様子を、“隠れ家”以外の言葉で言い換えることが、アンタに出来るかい？」

そのブラウンの言葉に、モローはしばし考え込んだ。そして、堰を切ったように、ふふつと微笑んだ。

「……まったくだ。出来ないね」

異国の真ん中にある、明らかに異国情緒溢れる外観の小屋。けれど、それはあくまで擬態で、中に入ればアメリカの一軒屋の趣。そ

れは確かに、隠れ家と形容する以外に、形容する方法がなさそうだった。いや、正確には、“隠れ家”という言葉がしつくりと落ち着きすぎていて、他の言葉が落ち着かない、そういうった感じだ。負けたといわんばかりに頭を振って、モローは言った。

「ここを、“隠れ家”と表現することに、何の異存もないよ、ブラウン」

その言葉に、嬉しそうな顔を隠さず、ブラウンは言った。

「うれしいね、アンタを言い負かせるなんて」

「なぜ？」

「なぜ、なんて聞きなさんな」。ブラウンは笑った。「勝つ、っていうのは、とんでもなく楽しいのさ。そういうもんだろ？」

そんなこんなと話を続けるうち、廊下を歩く二人の前に、ドアが現れた。けれど、そのドアは、アメリカでよく見られるドアではなく、引き戸だった。さすがに、部屋の仕組みまで変えることは出来なかったようだ。ブラウンは、その引き戸を思いっきり開いた。

「よお！ ハイネ！」

威勢のいい声で響くブラウンの声は、開かれた引き戸の向こうにある、部屋中に響いた。

その部屋は、まるで物置のようだった。

絵筆や紙ごみ、古い本などが、何の法則性もなく、有り体に言ってしまうばいい加減に、置かれていて、まるで異国のバザールのような趣になっている。そして、木炭の香りや汗の匂いや土の匂い、どういいう匂いなのかモローにはわかりかねるような匂いまでが混ざって、むせ返ってしまうような、重苦しい空気になっていた。

その部屋の真ん中に、男が座っていた。

無襟のシャツにパンツ、それはブラウンと一緒にだった。けれど、黒い、カーブのかかった髪の毛で、しかもブラウンと比してかなり若い。いや、自分と比しても猶若い、とモローは見当をつけた。それにこの男、まるで、野に咲く花のように、細やかで細かった。手も足も、ブラウンはもちろんの事、モローよりも細そうだった。

その男は、黒く細いものを握って、机の上に置かれた紙の上に何かを描いていた。時折、その細いものをナイフで削ったりしながら、ひたすら描線を描いていた。

その男は、ブラウンたちが来たのに気づかないのか、ひたすらその作業を繰り返していた。その様子に痺れを切らしたブラウンは、さつきよりも大声で声を発した。

「おい！ ハイネ！ 聞こえないのか！」

すると、ようやくその男は引き戸のほうに振り返った。

「……あ、ああ。聞こえてますよ、ブラウンさん。全く、うるさい人だなあ」

その男の声は、非常に若かった。声だけ聞いたら、ほとんど少年のようだった。それは、別に声変わりをしていない、とか、そういうことではない。声の伸び、転がり具合、そして飛びはね方が、少年のそれを連想させるのだ。しかし、その男の言葉で印象的なのは、その若さより、むしろ別の点だった。今の、わずか二文の言葉でもわかるほど、その男に訛があることだった。その訛は、アメリカ地方の訛り方というより、別言語が混じった訛り方であるように感じられた。

その男は、ようやくモローの事に気づいたらしく、「誰？」と誰何した。その質問に、ブラウンは「例の人だ」と答えると、男は微笑んだ。

「ああ！ あなたがもう一人の無任所乗員の方ですか！ ようこそ、僕らの隠れ家へ」

図らずも、彼の言葉から“隠れ家”という言葉が出たことで、モローとブラウンは顔を見合わせて笑った。分からない、といった表情で、男は唇を伸ばす。

「さて、モロー。紹介しよう」

仰々しく、手を男の方に向けるブラウン。筋肉隆々の男が、まるで席を案内するボーイのような仕草をするものだから、モローは噴き出してしまった。けれど、その結果にブラウンはむしろ満足した

ようで、笑顔を湛えながら続ける。

「この男こそ、わがペリー艦隊唯一の絵描きにして、無任所乗員の一人」

「ヴェルヘルム・ハイネです」

その絵描きは、そう名乗った。

「ヴェルヘルム？」  
「モローは首を傾げた。」「ってことは、君は移民かね？」

「はい」

頷くハイネの代わりに、ブラウンが彼の紹介をする。

「ああ、コイツは元々ドイツの出だ。だが、色々あってアメリカに移住してきたんだと。だから、ちよつと訛がキツいのは大目に見てやってくれ」

その物言いに、ハイネは機嫌を損ねたらしい。顔をしかめつつ、その少年のような声音を転がす。

「そういうことを言うから、あなたの言葉に答えたくないんですよ、ブラウンさん」

確かに、彼の言葉には、それこそ唾でも飛んできそうなくらいに強く息を吐き出す音があった。これは、ドイツ特有の子音“H”の使い方だ。若い声色には似合わない、強い音だ。

「と、とにかく」

モローは、ハイネの横に立ち、手を差し出す。

「よろしく。私はモローだ」

「あ、ああ」

ハイネは手を着ている服でごしごし拭いて、モローの手を握った。「よろしく」

ハイネの手は、海の男にありがちな、荒くれた手ではなくて、まるで春に生え出づる若葉のような、柔らかい手だった。しばし触れたことのない、柔らかな手だった。

「ごっほん。」

まるで、部屋中に響かせるがとき咳払いをしたのは、ブラウンだった。手を握り合い、今にも談笑でもしそうな雰囲気の二人に釘を刺したのだろう。そして、彼は言った。

「おい、モロー。お前、いい加減本題に入れよ。俺は気が短いんだ」  
そう、ブラウンはただ単に、だからと繰り広げられる挨拶に辟易としていたのだ。きつと、彼にとつては挨拶など、果てしなくどうでもいいことなのだろう。むしろ、挨拶を飛び越えた先にあるモ

ノ、それにしか興味が無いようだ。

彼に急かされるように、モローは本題を切り出した。

「なあ、ハイネ。君は、絵を描くんだってね。……どういふ絵が得意なのだね？」

「どういふ絵と言われても困りますが……」。ハイネは、黒髪を掻き揚げた。「元々、舞台の大道具の書割を専門にやっていますから、そういう機械的なものが一番得意ですが。けれど、一番得意、というだけで、別に何が不得意ということはありませんよ」

「じゃあ」

ハイネの横にあった机の上に、モローはさつき撃ってきた鳥をドン、と置いた。

「こいつを書けるか」

最初、ハイネは無反応だった。ただ、血を流して息を止めている鳥を眺めるばかりだった。けれど、次第に彼の顔から血の気が抜けていき、さらには目を回し始め、そして遂には椅子から転げ落ちてしまった。

「お、おい！」

モローが思わず地面に崩れた彼の顔色を見遣る。すると、彼は「血、血、血……」とつめきながら、目を回している。目の前に手をかざしても、ハイネは反応しなかった。

すると、その原因について、ブラウンが語りだした。

「ああ、ハイネは血を見るのが嫌いらしくてなあ。時折、血を見たりするといつもそうさ」

ハイネの上半身を起こして、今まさに気付けをしようとしていたモローは、思わずハイネの肩を取り落としてしまった。そのせいで、上体を起こされたハイネは、床に頭をぶつけてしまったのだが、モローはそれに気づかなかった。何せ、それほど驚いたのだ。

「おい、ブラウン」

「ん？ なんだい？」

「どうして、そんなヤツのところに私を寄越した？ “血を見るの

が嫌い” な人のところに、血がダラダラ流れてるものを手にぶら下げたヤツを案内するとは、一体どういうことだ？」

モローの正論に、ブラウンは茶色の髪の毛を掻きながら答える。

「なに、冗談だよ、ただの」

「どういふ類の冗談だ？」

「へっへっへ」

何を思ったか、ブラウンは肩を揺らして笑った。まるで、子供が大人を悪戯に引っ掛けたときに見せるかのような、大人気の無い笑い方だった。その様子をつぶさに見ながら、ようやくモローは、目の前にいる男がどういふ類の人間なのか判ってきた。ブラウンという男は、自分の好奇心や悦楽の類に従って生きている。例えば、ハインの驚く顔が見たい、そうブラウンが思ったとする。けれど、普通の人間だったら、分別というものが働く。“いい加減、大人なのだから、悪戯などするものではない”と。けれど、ブラウンは違う。多分、モローよりも年嵩が上であろうこの大男は、分別という垣根をまるでものともせずに飛び越えてしまう。なるほど、付き合いつらい手合いだ、と、モローは内心でそう分析していた。

「イテテテ……、転んだときにでも、頭を打ったかな？」

ようやく、ハインが上半身を起こした。それに一瞬早く気づいたモローは、机の上に置かれている鳥の屍骸を手にとって、彼から見えないように背中に隠した。

そんなモローの気遣いも知らず、ハインは上半身を起こした格好で、ブラウンに言葉を投げ付ける。

「あの！ ブラウンさん！ ああいうものを持ち込んでもらったら困るんですよ！ 僕、ああいう手合いのものが苦手なこと、ブラウンさんだって知っているでしょ！！」

「はっは、悪い」。ブラウンは、意地悪に笑う。「忘れてた」

「そんなわけ無いでしょう！」

「なんでそう言い切れるんだ？」

未だ、悪戯っぽい笑顔を浮かべるブラウン。するとハインはブラ

ウンの顔を指した。

「あのねえ、ブラウンさんの顔がこういう風に笑っているときは、大抵嘘をついてるときなんです。まったく、もういい加減、付き合っても長いんですから、そういう分かり易い嘘をつくのはやめてください」

「へいへい」

ブラウンは、そっぽを向いてしまった。

そんな、二人のやりとりに見飽きたモローは、部屋に乱雑に置かれている絵を手を取った。どうやら、普通の紙の上に、木炭で描線を描いているらしい。その木炭の描線は、空を行く、さつきモローが撃ち落したのと同種であろう鳥が描かれていた。その描線の確かさは、絵に対する知識のないモローでも判るほどだった。

「上手いものだな」

モローが呟くと、さつきまでぶりぶりと怒っていたハイネは微笑んだ。

「褒めていただけなんって、光栄です」

「いや、私は絵に詳しくはないんだが」と前置きして、モローは続ける。「自信のある論文とか、報告書に載せたい類の絵だな」

「ほ、ほんですか」

顔を上気させるハイネ。しかし、モローは続けた。

「しかし、この鳥の名前、知っているか？」

「え？ この鳥、ですか？」モローの手にある絵を見遣りつつ、ハイネは首を傾げた。「さあ？ ただ単に、目に入った鳥を写生しただけですから」

「ま、そうだろうな」

そのモローの呟きに、ブラウンとハイネは首を傾げる。

「どうのことですか？」

ハイネの言葉に、モローは答える。

「これでも、“動植物の収集”を仕事にしている身だからな。人並み以上の知識があるはずなんだ。……一応、ダメ元で聞いてみたが、

本当にダメだったようだ」

そのモローの言いように、二人が顔をしかめた、その瞬間だった。  
「A f o - D o r i」だ」

そんな聞きなれない言葉と一緒に、部屋の扉が開け放たれた。

扉の向こうには、男が立っていた。

大きな黒いフロッグコートをまとった、年の頃中年ほどの小男だった。黄色に着色された房付きの肩章をつけて、左腰に剣を佩いている。けれど、その男自身の背に、その装束はまるで似合っていない。まるで、子供が大人の服を着ているかのような、そんな滑稽さを感じざるを得ないのだ。

けれど、モローの目から見ても、その男が使節団の中でもかなり高位にいる人間であることは判った。

その小男は続ける。

「馬鹿な鳥」とでも英語訳すればいいだろう。……あ、ようこそ、モロー君。わが研究室に」

その小男は、部屋の隅にあった、比較的豪華な椅子に腰をかけ、鷹揚に微笑んだ。この鷹揚さは、知識階級の中でも、特に洗練されたもののように感じられた。心なしか、ハイネとブラウンが居ずまいと背筋を正した。

その二人の変化に、となりにいたハイネの腰をつつくモロー。

「な、なんですか」

小声で聞いてくるハイネに、モローは聞いた。

「誰だ、あの人は」

「あ、ああ、あの人は……」

説明しようとしたハイネの言葉を遮って、その小男は自己紹介をする。

「ああ、申し遅れた。私は、サミュエル・ウエルズ・ウィリアムズ。通訳官だ」

「はは、通訳官？」大口を開けて笑うブラウン。「主席、っていう字が抜けてないか？ それにウィリアムズの旦那、アンタ、通訳

官の仕事よりも、むしろ趣味の方が忙しいじゃねえか」

「何を言う」

ウィリアムズは、苦笑いしつつブラウンの言葉をかわす。

「さっきの“馬鹿な鳥”の件だって、現地人との折衝の折、その折衝の幕間に聞いてきたものだ。これでも、仕事はしているよ」

「仕事、ああ」ハイネは言う。「今日も、提督殿のお付で？」

ウィリアムズは、フロックコートの釦を数個外しながら答える。

「ああ。あの、酔いどれ提督殿と来たら困ったものだ。酒を呑んでいる場面以外では、まるで役に立ちはしない。通訳の側が、適当に話を作らなくてはならないからな。……と、これ以上は愚痴になつてしまうか。いや、失礼失礼」

「どうやら、と、ウィリアムズという男についての情報を、モローはまとめ始めた。」

ウィリアムズという男は、この“隠れ家”の所有者らしい。そして、ハイネとブラウン二人に、それなりに敬意を払われる存在のようだ。そして、使節団の中では、提督のペリーと共に行動するような、高位の通訳官だということは分かる。だが、ブラウンの言うように、「主席通訳官」なのかは分からないが。

そういう色眼鏡を以ってウィリアムズの姿を見ると、確かにウィリアムズの姿には「知性」があった。確かに、主席通訳官くらいのことにはやっていそうな外見だ。

「なるほど、ウィリアムズさん」

改まった口調でモローが声を掛けると、ウィリアムズは首を横に振った。

「ウィリアムズでいいよ」

ならば、とモローは続ける。

「ウィリアムズが、この“隠れ家”の持ち主の様だね」

「ああ、そうだよ。最初は趣味のために間借りしたんだ」

「ま、間借り？」

こんな異国に間借りなどという習慣があったのか、と妙な感心を

覚えるモローは、はあ、とため息をついた。すると、ふふつとウイリアムズは微笑んだ。

「ま、正確には、打ち捨てられて何十年も経ったような、廃屋を無断で使わせてもらっているのだがね。こちらの習慣では、“一族が絶えてしまった家には死に神がつく”などと言って、あまり人が住みたがらないらしいのだ。だから、文句を云う者は誰もいなかった」  
そう、足を組んだまま伸ばして、微笑むウイリアムズ。

「ところで」モローは聞いた。「さっきあなたは“趣味”と言ったが、どんな趣味のためにこんな小屋を？」

「ふふ、なんだと思う？」

そう言つて、ウイリアムズは立ち上がり、部屋の隅のほうにあった戸棚を開いた。

その戸棚の光景に、モローは我が目を疑った。そして、叫んだ。

「え、これは、“ウォードの箱”ではないですか。しかも、こんなにたくさん！！」

戸棚の中には、“ウォードの箱”が何個も置かれていたのだ。

ウォードの箱、というのは、シルエツトは家型をしている。けれど、その骨組みと底部数インチ以外は皆ガラスで出来ている。非常に、密閉性の高いものである。けれど、これを使う人間は、植物を扱う人間でしかありえない。なぜなら、ウォードの箱というのは、植物の長距離輸送という目的のために作られたものだからである。

当時、新世界で発見した植物をヨーロッパに運ぶためには、船による輸送しか手段がなかった。船というところは、植物にとっては過酷な環境だ。生水が欠乏しがちであるし、海風や潮がある。そのせいで、輸送の途中で運んでいた植物が枯れてしまう恐れがあった。そこで発明されたのが、ウォードの箱なのである。

ウォードの箱の肝は、その箱の中だけで全てを循環させようとすることである。外界との関係性を全て閉ざしてしまい、その中だけで完結する“自然”を作るのが肝なのである。

具体的には、ウォードの箱には、水を入れなくてもよい。ウォー

ドの箱の中で、自然界で行なわれているような水の循環が行なわれているからである。

この発明によって、植物の長距離輸送が可能になった。長距離輸送のネックであった水の問題も解決したし、海風の問題も、箱が密閉されているために解決をみたのである。

その箱が、モローの眼の前に広がっていたのである。

「ウィリアムズ、これは一体……」

モローが、驚愕の顔を隠さずに訊く。けれど、ウィリアムズは微笑むばかりで何も答えてくれない。代わりに、ハイネが答える。

「ウィリアムズさんは、植物の収集が趣味なんですよ。確か、赴任地の清でも、お集めだったんですよね？」

ウィリアムズは頷いて、ハイネの言葉に付け加える。

「この前まで、私は清国で通訳をやっていたのだが、清国でもよく集めたものだ。きつと、日本でも面白い植物が手に入ると思ってね、ここまで持ってきた次第なんだ」

「なるほど」モローは言った。

「実は、仲間が欲しかったんだ」と、ウィリアムズ。「植物集めなんていう道楽趣味、共有できる者がいなくてね。要は、その植物の有用性や希少性を理解してもらえるような人間がいない。趣味人にとって、それは非常につまらないことだ。……で、あなたをここに連れてきてもらった次第」

体が大きいブラウンは、体を縮めて恐縮している。きつと、ウィリアムズに言い含められていたのは、この人の良い大柄な男だったのだ。

そんなブラウンから視線を外しつつ、モローは皮肉を言う。

「つまり、あなたの植物自慢のために、私はここまで連れてこられたわけだ」

「いや、ものは考えようだよ、モロー」ウィリアムズは反論する。

「あなたにとつて、有用な、あるいは希少な植物の情報というのは、咽喉から手が出るほど欲しいものだろう？」

そう言われて、モローは初めてその意味を考えた。

確かに、ウィリアムズという言葉にはまるで矛盾がない。確かに、自分の知らない植物の情報を手に入れるということは、植物の収集を任務にしている自分にとって有用なものに違いない。それに、自前のウオードの箱を持っているほどの“趣味人”ウィリアムズであれば、その情報も、かなり質の高いものに違いない。

モローは不意に、ふ、と笑った。

「なるほど、なかなか、条件がいいじゃないか」

「ふふ、だろう？」

モローとウィリアムズは握手を交わした。

それから、モローは、よくその“隠れ家”に足を運ぶようになった。

「おう！ モロー！」

「やあ、モローさん」

いつも、そこにはブラウンとハイネがいた。いつも通り、“隠れ家”は絵や本の山で汚れていて汚い。それに、空気も微妙にこもっている。けれど、窓から差し込む光だけは、どこか優しげだった。それも、いつもとまるで変わらない。

そんな部屋の中で、いつも絵に埋もれるようにしてハイネは絵を描いていたし、積んである本に腰掛けながらブラウンはハイネを冷やかしていた。もはや、いつものことなので、モローは何も言わない。何も言わず、紙くずを払いのけ、椅子の上に座る。

「ハイネ、今日は何を書いているんだ？」

そのモローの質問に、ハイネは答えた。

「ええ、“Syuri-Zyo”を描いています」

「“Syuri-Zyo”？」

ハイネの言葉だから、ドイツの言葉だと思ったのだが、どうやらそれは違ったらしい。ハイネは答えた。

「ええ、この島の王が住んでいる城ですよ。ちょっとこの前、提督

殿に従ってそちらに出向いたんですけどね、あまりに印象的だったもので、こうやって描いています」

確かに、ハイネの前に置いてある紙の上には、垣と壁が張り巡らされた、城塞のような建物が描かれていた。けれど、それは、モロの知っているような、西洋的な城とは似ても似つかない。物見塔がないようだし、城塞にしてはあまりに壮麗すぎるくらいがある。異文化というものはかくも我々の常識と違うものか、とモローは首をひねる。

「全く、ハイネは変なヤツだよなあ」

突然、ブラウンは大口を開けた。

「何がですか」

「だってよお、あんな建物、全然印象に残らないだろ！　むしろ、出されたあの食事！　あっちの方が気になったぞ！」

そのブラウンの言葉に、モローが訊く。

「ん？　ブラウンも提督殿についていったのか？」

「ああ。俺は写真技師だぞ？　そういう公式の場面には、絶対に呼ばれるんだよ。っていうかよお、聞いてくれよ。向こうの城で出される食事の、量が少ない事！　あんなんじゃ、二日酔いの朝飯にもなりやしねえ」

そう、ぷりぷりと怒るブラウン。

だが、モローとしては、眼の前に置かれた少ない食事に辟易しつつ、公式の席に合った格好の格好に身を包んだブラウンの姿を想像してしまい、むしろ微笑ましかった。

ところで、これはブラウンたちが預かり知らないことであるが、彼らアメリカ使節に出された食事が少ないのには、しっかりとしたわけがある。

東洋において、“断る”という行為は大変に難しいものであったようだ。それは、日常生活から公式の場面でも同様だったようで、公式の場面でも“断る”ということを出来ないらしい。だが、やはりどうしても“断る”場面というのは登場する。なので、東洋では婉曲的な表現が好まれた。つまり、東洋では“やんわりと”断るやり方が発達したのである。

具体的なことを言おう。例えば、招かれざる客が家に来たとしたら、粗略な食事を出して饗応する。そうすることで、客にこちらの気持ち、すなわち、客に、こちらが迷惑している旨、を汲んでもらおうとするのである。

つまり、ブラウンたちアメリカ使節は、“邪険な”扱いを受けたということなのだ。けれど、アメリカ使節たちには、そういう回りとどい拒絶は届かないのだ。なぜなら、東洋の慣習は、あくまで東洋の人間の行動を決めるものでしかない。つまり、その埒外にあるアメリカ使節には理解が及ばないのだ。

事実、この話を聞いているモローなどは、「なるほど、暖かい気候の割に、この国は案外不作と見える。農業指導などをして、友好を深めるほうが良いな」などという算段を考えている。邪険な扱いを受けている、という事実にはさえ気づいていないのである。

「しかし」モローはブラウンを冷やかした。「何より食い気とは、ブラウンらしいな」

「うるせえやい。こちらら、ガタイが大きいもんでな。大食らいなんだよ」

そんなブラウンの言葉に、部屋中が笑いに包まれた。ハイネは青年らしく真つ直ぐな声色で笑いたてたし、モローは紳士らしく声を潜めて笑った。

「なな、なんだよ……」

最初は戸惑っている気味だったブラウンだったが、そのうち彼もつられて笑い出す。そして遂には、誰よりも大きな声で笑い出す。「でも」

笑いが途切れた頃、不意にハイネが呟いた。その呟きに、モローたちは耳を傾ける。

木炭で描線を描きながら、ハイネは言った。

「いつまで、ここに滞在するんですかね」

「ここって、この小屋？」

ブラウンの言葉に、ハイネはかぶりを振る。

「違いますよ。この島、琉球に、ですよ。一回、目的の本島に近づいたというのに、また琉球に戻ってきて、こうやって待機しているなんておかしいですよ」

当時、彼らが参加しているペリー艦隊は、足踏み状態にあった。

一度、ペリー艦隊は、目的の島国の沖に達し、向こうの政権に親書を手渡した。だが、向こうの政権が、一向に態度を明らかにしない。なので、提督は「一年間の猶予を与える」と向こうの政権に言い放ち、船の舳先を琉球に向けたのだ。そして、こうして今は、琉球に滞在しているという状況なのである。

「まったくだな」ブラウンも呟く。「どうせ大砲を積んでいるんだ。ドン、ってやってやればいいんだ。なのに、どうしてこうまどろっこしい手を打つかねえ……」

提督殿には提督殿のお考えがあるんだろうな」と、モロー。「きつと、目的が目的だからな。あんまり、武力行使に出るのも躊躇われるのだから」

そもそも、当時、アメリカがその島国と通商を結ぼうとしていたのは、その国に、寄港地としての役割を期待しての事だった。

当時、アメリカは空前の捕鯨ブームであった。それは、工業油としての鯨油を得るためのもので、当時一流国の仲間入りを果たそうと目論むアメリカにとって、鯨油の確保は国運をかけた関心事であった。そのため、アメリカ船が、七つの海に漕ぎ出していったので

ある。

だが、船には多くの乗員がおり、彼らの衣食などが常にネックになった。それに、長旅を続けければ、船は当然傷んでいく。そのために、当然寄港地は必要だったのである。

今回の使節団も、東洋の島国、そして、太平洋を挟んで米国と隣国の関係である日本と、友好的な関係を結ばんがためにここまでやってきたのである。

けれど、予想以上に日本という国は手ごわいのだ。

かの国は、あまり他の国と国交がないらしい。清国と李氏朝鮮国、そしてオランダと交易をしているようだが、それらの交易にしろ、それほど大幅なものではないようだ。どうしたわけか、かの国は異国との交流を警戒している風があるのである。

しかも、かの国はなかなかしたたかかのようなふうであった。

ロシアの異国船も、日本と国交を結ぼうと、たびたび向こうの政権と接触を図ろうとしているらしい。けれど、どうやらそれも芳しくないらしい。毎度、態度保留のまま、結局帰らざるを得なくなっているのである。

そんな状況だから、「大砲でドン」というブラウンの意見も、的を射ているように見える。だが、アメリカ側には、「大砲でドン」と出来ない事情があった。例えば、かの国に戦争を吹っかけてしまったとしよう。そうすれば、アメリカ側にも負担がかかる戦争になる。なぜなら、アメリカとかの国は、非常に離れているからだ。せいぜい寄港地程度の目的しかない島国と戦争をしたところで、見合うだけの利益が見込めないのである。なので、とにかく友好的に通商を結ぶのが、アメリカ側の狙いだったのである。

もちろん、こんな話は、ブラウンたち乗員のあずかり知る話ではない。これを知っているのは、あくまで物事を俯瞰的に見ることに出来る立場にある人間、あるいは物事を俯瞰的に見ることに出来る人間だけに限られる。だが、前者にしろ後者にしろ、そうそうザラにいるものではないのだ。

「そういえば」

つまらなそうにあくびを浮かべたブラウンは、辺りを見渡した。きつと、政治向きの話など、この男には無縁のものでしかないのだろう。

「ん？ どうした？」

モローが話を先に促すと、ブラウンは続ける。

「ウィリアムズの旦那が居ないよな」

「ああ、そうだな」

モローも、辺りを見渡す。けれど、部屋には当然3人しかいない。その疑問には、ハイネが答えた。

「ああ、ウィリアムズさん、今日は提督殿たちと会議のはずですよ」  
フヒユウ。ブラウンは口笛を鳴らした。

「いやあ、さすが主席通訳官。俺たちとはわけが違うよな」

そんなブラウンの物言いに、モローは言った。

「お前たちはまだマシなほうだろう？ 私なんか、提督殿の顔さえ見たことがないんだぞ？ それに、お前が文句を言っているような食事だって、食べたことがない。私からすれば、お前だって羨ましいぞ、ブラウン」

「そういうもんかね」

ブラウンは、そっぽを向いてしまった。きつと、話に飽きてしまったのだろう。

そんな頃、部屋の扉が開いた。

「まったく、会議など無意味だな」

部屋に入ってくるなり、ぼやきから入るのはウィリアムズだった。「どんなに会議を重ねたところで、結局は通りいっぺんの事しか決まらない。なら、会議など、するだけ無駄だというのに。……おつと、失礼」

ウィリアムズは己の愚痴を振り払ってから、おもむろに乱雑な部屋を見渡した。そして、フロックコートの釦を2個外してから、突然言葉を発した。

「ここを、引き払わないといけないな」

「え？」

ウィリアムズ以外の3人は、思わず耳を疑った。ここを、引き払う？ それ、どういうことですか？ 何言ってるんだよこの旦那は、と、3人が3人、目配せで会話する。

その空気を察したのか、ウィリアムズは説明を加える。

「ああ、実はな、近く、日本に向けて出航することとなった」

「え！？ そんな急に？」

「しかも、こんなに早く！？」

そんな、ハイネとブラウンの言葉は、無理もない。ペリー提督は、「一年後、日本に伺う」と明言したはずなのだ。だが、まだその約束から一年経っていない。まだ、せいぜい半年ほどしか経っていないのに、琉球を発つとはどういうことだろう。琉球から日本の政都まで、せいぜい10日しかかからないはずにも関わらず、である。

「あの、酔いどれ提督のせいだ」

ウィリアムズは苦い顔をしつつ続ける。

「あの提督殿は、元が軍人のせいか、どうにも荒っぽいところがあってな。“これまで、様々な国が、かの国と通商を結べなかったのは、その交渉が、あまりに紳士的だったせいだ”と唱えておいでだ……恐らく、かの国に、揺さぶりをかけるつもりなのだろう。恐らく、な」

「けど、余りに急な話だな」と、モロー。

「いや、そうでもないさ」かぶりを振りながら、ウィリアムズは続ける。「だって、一般の乗員に話が伝わるのは、きつと2月に入ってからだろうからな」

「今は1月の中ごろだから……、なるほど、僕たちは半月近く早く、この話を聞かされたんですね」

ハイネがそう呟くと、ウィリアムズは続ける。

「ああ、これはまだ、極秘の話だ。だが、我々にとっては、早めに聞いておいてしかるべき話だ。何せ、この“隠れ家”を、始末する

必要があるからな」

そう言っつて、ウィリアムズは辺りを見渡してため息をつく。紙類や本、図版や植物の押し型など、様々なものが乱雑に、そしてうず高く盛られている。まるで、倉庫のような雰囲気すら醸している。仮に、「あと三日のうちに片付けろ！」と命令されたりしたら、途方にくれてしまうような量がある。確かに、早めに聞いておいてよかった情報には違いあるまい。

【6】

「と、いうわけで」ウィリアムズは続ける。「早めにここを片付けようではないか」

「……へい」

3人は、生返事を浮かべた。

けれど、この話は結局ふいにされた。

そもそも、3人が3人、ものぐさなのもその一因であつた。だが、それ以上に、あと半月という中途半端な猶予が、3人からやる気を奪っているのである。つまり、「あと半月もあるんだから」とばかりにハイネは絵を描き続け、「あと半月もあるんだから」とばかりにブラウンはハイネを馬鹿にし、「そもそもここに私物を持ち込んでいないし」とばかりに、まるで部屋を片付けることなどモロイは気にも留めていない、という具合なのである。頼みのウィリアムズも、公式の仕事が忙しくなつた関係で、しばらく“隠れ家”に顔を出してこなかつた。

なので、しばらく部屋を片付ける件を忘れていたのだが、2月の頭、「5日後、日本に出航する」という情報が公になつてから初めて、「そういえば、部屋を片付けるはずだつた」ということを思い出した3人なのだつた。

「まったく、君たちには困つたものだな！」

と、ウィリアムズは唾を飛ばす。3人は、しゅんとしながら、甘んじてその言葉を受ける。“隠れ家”の部屋の中は、以前と変わらず、物で散乱してごちゃごちゃとしていた。その中で、大人3人がこうして怒られている図は、かなり滑稽だつた。

「半月前に、“出航する”と情報を与えておいたのに、何もしていないとはどういうことだ！ 君たちは大人だろう！？ なのに、自己管理もできないとは、君たちはもう……！！」

「ちよつと待つてくれないか」

話が途切れるところを待って、モローが口を開く。すると、まるで悪魔のように禍々しい表情を浮かべつつ、ウィリアムズは話を先に促した。その剣幕に少し圧されつつも、モローは続けた。

「あの、この“隠れ家”に、まるで私物を持ち込んでいないのだが、私は」

「そ、そうなのか」

納得した、という風にウィリアムズが呟いた。

「あ、旦那？」

申し訳なさそうに、ちょっと肩をすぼめながら、ブラウンは手を上げる。今度は何だ、と言わんばかりの表情を浮かべつつウィリアムズが話を先に促すと、ブラウンは続けた。

「俺も、モローと同じ口なんだが？」

「そうだったか？」

ウィリアムズの言葉に、ブラウンは続ける。

「あのよお。俺は写真技師なんだ。写真っていうのは、案外デリケートなものよお。こんな、日の光がたくさん入るようなところに、写真の道具なんて持ち込めねえよ」

「そ、それもそうだな」

またもや、納得した、という風に頷くウィリアムズ。

「あのう、ウィリアムズさん」

今度は、ハイネの番だった。ハイネはハイネで、これ以上なく申し訳なさそうな顔を浮かべつつ、手を上げていた。けれどその顔は、さっきのブラウンの顔とは違う性質の申し訳なさそうな表情だった。もう飽き飽きだよ、という顔を浮かべつつ、ウィリアムズは呟いた。

「まさか君も、“私物を持ち込んでいない”とでも言うのかい？

でも、残念だ。君はいつもここで絵を描いていたものな、私物がな

いとは口が裂けても」

そう、ウィリアムズが口上を垂れている間に、ハイネはキャンパスやら紙束やら木炭やらを抱えだした。華奢な彼の体に丁度収まるくらいの荷物だった。

「この通り」ハイネは両手に荷物を抱えつつ言った。「これが、僕の私物の全てです」

「え、嘘だろう？」

思わず、ウィリアムズは呟く。

「嘘じゃありませんよ。お疑いなら、部屋を見てくださいよ」

ハイネの言う通り、散乱する部屋には、ハイネの私物と思しきものは一切残っていないかった。残っているのは、植物学関係の本や、清国から持ち込んだと思われるような、押し花の類であった。

そう。何のことはない、3人がこの部屋を片付けようとしなかったのは、自分の私物がまるでないか、あるいはほとんど無かったからなのだ。つまり、この部屋を汚していたのは……。

「へえ、ウィリアムズ」

「旦那」

「ウィリアムズさん」

3人は、ウィリアムズを睨む。今、自分が劣勢であることによく気づいたのか、ウィリアムズは後退しつつ両手を軽く上げる。相手を宥めるようなポーズだ。

攻守交代。

まず、口火を切ったのは、ブラウンだった。

「へえ、旦那。頭ごなしに怒っておいて、そういうオチですかい？」

次に続くのは、少々気の弱い風のある、ハイネだった。

「まったくですよ。さっきのお叱りは、どういふことなんですかね？」

最後に口を開いたのは、一番弁の立つ、モローだった。

「そういえば、この部屋に残っているのは、すべて主席通訳官殿のものですなあ。それを、あと五日で片付けなくちゃならないなんて、主席通訳官殿は大変ですなあ……。ああ、なんだか、さっきウィリアムズに怒鳴られたせいで、どうも立ちくらみが……。ブラウン、ハイネ。宿舎に戻るとするか」

そう言つて、モローは部屋から出て行くポーズを見せた。ブラウンとハイネも、それに続くポーズを見せる。

「ちよ、ちよつと待つてくれ」

明らかに狼狽しているウィリアムズに、モローは振り返りもせず続ける。

「いやあ、主席通訳官殿は大変だねえ」

「ああもう！ 分かつたよ」ウィリアムズは頭を下げた。「すまなかつた。頼むから、手伝つてくれ！」

すると、3人は声を合わせたように噴き出した。その笑い声は、部屋中にこだまする。顔を上げたウィリアムズは、何がなんだか分からない、といった顔で立ち尽くしている。

「はっはっは。分からないかなあ」肩を揺らしながら、ブラウンは笑う。「ほんの、冗談だよ。旦那は忙しいもんな、手伝つてやるよ」  
「そういうことです」

ハイネと共に、モローも頷く。

そうして、4人で部屋を片付けることになった。

きつと、数ヶ月しか使われていないにも関わらず、この小屋には多くのものが詰め込まれていた。一番多かつたのは、やはり植物の押し型であつた。ウィリアムズが清国で集めたものや、琉球で集めたものなどが、未整理のまま乱雑に置かれていた。ふと、モローは手に持った押し型を眺めると、それが新種の植物だったりするものだから、手がつい止まってしまう。

「ウイ、ウィリアムズ、これはどこで収集したのだ？」

「ああ、これは確か、清国の蘇州探検の折に……」

「じゃ、じゃあ、この花は……」

「ああ、これは香港でとつたものだ。名前が分からない。多分新種だろう」

そんな話題が、モローとウィリアムズの間でなされてしまう。なので、その二人を引き離すのが、ハイネとブラウンの主要な仕事となつてしまった。けれど、何だかんだで一日をかけ、ようやくあら

かたの荷物を搬出し終えた。そうして搬出してみると、“隠れ家”の部屋が案外大きかったことが分かった。

「しっかしまあ」

ブラウンは、ほとんどガランドウになってしまった部屋を見渡す。さっきのさつきまで、椅子や机、紙類や本で散乱していた部屋だったはずが、もはや空白を持って余すだけの空間に成り果てていた。夕日だけが、その空白に花を添えるばかりだった。

「こんなにガランとしちまうと、なんだか寂しいな」

「まだまだ、ガランじゃないですよ」

ハイネは部屋の隅を指した。

「あそこに、まだ棚がありますよ。あの中に、何か無いんですか？」

「

その棚、以前開いたことがあったな、とモローはふと思う。確か、あの中には……。そうやって思い出そうと何とか頭を回転させ、ようやく答えを導き出した。

「ああ、あの中には、“ウオードの箱”が入っていたのではなかったか？」

「そうだ！」

その“ウオードの箱”の持ち主であるウィリアムズ自身も忘れていたらしく、慌ててその棚を開く。すると、やはりその棚の中には、中身が入っていないウオードの箱が整然と置かれていた。

「それも出さないといけないのだ。ウオードの箱は、貴重品だからな」

ウィリアムズの指示で、これらウオードの箱も、慎重に運ばれ出してゆく。空っぽなこともあり、そこまで重いものではないもの、けれど軽いものでは決してない。その棚はかなり奥行きがあるらしく、途中から、ブラウンが棚に潜る格好になった。

そうしてウオードの箱も運び出されていったのだが、その一番奥に、妙なものが隠れていた。黒い布巾のようなもので隠された、箱状のものだった。大きさは、両手で抱えられる程度の大きさだった。

それは、外で仕事の次第を見守るモローからでも確認できた。  
「なんだあ？」

棚の奥に潜るブラウンは、呆れたような、あるいは素っ頓狂な声を上げた。とりあえず出してみる、というウィリアムズの命令に従い、ブラウンはその箱を引きずり出した。

持ち主のはずのウィリアムズに確認を試みたものの、「いや、判らん」と首を横に振るばかり。そのウィリアムズに分からないならば、皆に心当たりがあるはずも無く、黒い布巾で隠された箱を、4人は無言で見下ろしていた。だが、そのうち、誰かがこんなことを言い出した。

「なんにせよ、中身を確認するべきではないか？」

あとで思い返してみても、それが誰の発言なのか思い出せない。

もしかすると、誰も発言していないのかも知れなくて、皆の総意のようなものが、言葉として浮かんただけだったのかもしれない。

けれど、中身を改めてみよう、という気分だけは、払拭できそうも無かった。箱らしきものの上にかけられたその布巾を、モローがおもむろに取り去った。

その布巾の下には、ウオードの箱があった。

しかし、他のウオードの箱とは違い、中身が入っていた。中にはまるで三日月のように茎がしなる、妙な植物が入っていた。見た目は、シダに近い。だが、シダと言いつつしてしまうには何かが足りないようにも感じる。いや、見ればランにも似ている気もするし、ユリにも似ている気がする。とにかく、見れば見るほどその正体を見失ってしまうような、そんな植物が入っていたのである。さすがにウオードの箱に入っているだけのことはあって、その植物はしなやかに伸びていた。

「ウィリアムズ」モローは、感嘆の声を上げた。「この植物は、何だ？ これでも、動植物の収集をしている身なのだが、まるで思い当たらない。新種か？」

「さあ、こつちが訊きたいくらいだ」と、ウィリアムズ。「この棚にウオードの箱を入れたのは半年前だというのに、まるで記憶がない。多分、清国で集めたものなのだろうが、だが、それにしてもどこで集めたのか記憶がない。ちよつと待て」

外に走り出すウィリアムズ。そしてすぐ戻ってきた。手には、古臭い帳面が握られていた。その帳面は？ とモローが訊くと、日記を兼ねた備忘帳だ、収集した植物についても書いてある、と簡単に説明した後、ウィリアムズはその帳面をめくり始めた。

「どうだ、見つかったか」

モローが、話を先に促す。だが、促せば促すほど、ウィリアムズの表情が曇っていく。しまいには、帳面をパラパラめくりながら、頭を掻き始めてしまった。

「いや、だめだ。備忘帳にさえ書かれていない。どういうことだ？

」と、ウィリアムズは半ば投げ出し気味に言葉を続ける。「確かに、清国で手に入れた代物のはずだが？」

「おいおい」埒外の会話に飽きたのか、ブラウンが口を挟んだ。「いい加減、これだけに時間を使うわけにもいかないんじゃないか？

コイツの正体なんて、どうでもいいだろう。早く、運ぼうぜ」

「ああ、そうしたいのは山々なんだがな」

突然、ウィリアムズは顔をしかめた。まるで、その植物を、不倶戴天の敵であるかのように睨みつけている。

「これでも私は、一回採ったことのある植物は忘れない。これは、私の自慢の一つなのだがね。だが、この植物だけは、私の記憶からすつぱりと抜け落ちていた。ああ、奇妙だ、奇妙キテレツだ」と、ウィリアムズはここまで一息で言った後、突然こんなことを言い出した。「……この植物を、私の部屋にまで持って行きたくないな。なんだか気味が悪い」

「そんな、子供みたいなことを……」

と、ハイネが唇を伸ばすと、ウィリアムズは言った。

「じゃあハイネ、これを引き取ってもらえないか？」

「嫌ですよ」ハイネは即答した。「別に、僕は植物を集める趣味はありませんし」

「じゃあ」ウィリアムズは、顔をブラウンに決めた。「ブラウンはどうだ？」

突然話を振られたブラウンは、面倒そうに顔をしかめ、首を横に振った。

「旦那？ 俺は写真技師だぜ？ 部屋に、そういう生モノを持ち込みたくないんだよな」

ブラウンにさえ断られてしまったウィリアムズは、仕方なく、といた趣で、モローの方を向いた。

「なあ、モロー君」

「はい、喜んで！」

即答だった。

そもそも、モローもウィリアムズも見たことがない植物ということとは、十中八九新種の植物である。動植物の収集が任務であるモローからしたら、これ以上なく欲しいモノなのである。

「やっぱり、そう言うと思っただよ」

ウィリアムズは、イヤイヤそうに、その植物の入ったウオードの箱を指した。

「じゃあ、君にあげよう。ついでに、そのウオードの箱もつけてあげよう。これ以上ない大判振る舞いだ。受け取ってくれたまえ」

「……いや、別に、あげたくないっていうのなら、別に頂かなくて結構なんです」

モローがそう言うと、ウィリアムズは続ける。

「いや、君にだけはあげたくないんだ。だってそうだろう？ 植物の価値を知っている人間に、わざわざ新種かもしれない植物をやっってしまうなんて」

つまり、ウィリアムズが心配しているのは、新種の植物を発見したという己の栄光を、モローに奪われてしまうのではないかという懸念なのである。

ウィリアムズは続ける。

「いや、別にハイネやブラウンにくれてやる分には最早どうでもいい。だが、君にだけは渡したくなかったんだ」

そのウィリアムズの言い分に、ちよつとモローはむっとしながら答える。

「いや、何度も言いますけど、別にあげたくない、っていうなら、別に頂かなくても結構なんですが」

「ああ、だが、どうしても手元に置きたくない！　だが、かといってここに打ち捨ててしまうのも勿体ない！　ああ、神よ、私はどうしたらいいのですか！？」

そんな奇妙な逡巡を繰り返すウィリアムズに、ついに短気なブラウンが怒鳴った。

「旦那！　そんな分からないことを言うもんじゃねえよ！　旦那が手元に置きたくないっていうなら、別にモローにくれてやっても何の問題もないだろうによ！」

ちよつと眉を吊り上げながら、ハイネもドイツ訛で諭すように、ウィリアムズに言葉を掛ける。

「そうです、ブラウンの言う通りです。手元に置きたくない以上、もうウィリアムズさんにこの植物の所有権はないんですから、それを誰が持つても、問題ないでしょう？」

「さすが、ドイツ人。理屈っぽいねえ」ブラウンが、茶々を入れた。結局、その植物の所有権は、モローに渡ることになったのであった。

五日間は、相当に忙しかった。

ハイネやブラウンたちも己の仕事のまとめが忙しいようだし、ウィリアムズもまた通訳の仕事が忙しいらしい。いや、それだけではない。船に乗っているほぼ全ての乗員達が、時間を惜しむかのように足早に己の仕事に励んでいる。出航直前というのは、どうしても忙しくなるものなのだ。

だが、その中で唯一暇を持って余っていた人間がいた。

無任所乗員・モローである。

元々、モローには任所がないので、船に関する賦役がない。かといって、任務である“動植物の収集”を、まさかこんなバタバタとした出航前に行なうわけにも行かない。では、収集したものを整理でもすればいいのだろうか、マメな性格のせいでそんなことは既に済んでしまっている。

結局、手持ち無沙汰な時間を、甲板の手すりに寄りかかりながら潰すしかなくなっているのである。

こういうとき、モローはいつも妙な孤独感に苛まれる。船という小さな社会において、特に何を為すでもない人間。任所のある乗員から見れば、モローのような人間は「鼻持ちならない」人間に映るのだろう。それが分からないほど頭が悪いわけではないものの、かといってそれを打開できるほどには人付き合いのよくないモローは、結局一人、うじうじと悩むしかない。

甲板の上では、海の男たちが荷物を右から左へ流している。

その様子を、ただ目で追うしかないモロー。

ため息をついた、その瞬間だった。

「モロー」

彼を呼ぶ声がした。思わず声が出た方向に向くと、そこには上官の姿があった。黒いフロックコートに、クックハットをかぶるといって、典型的な上級武官の装束を身にまとっている。

「ああ、上官殿」

生返事を返すモロー。上官もまた、胡乱に続ける。

「暇そうだな」

「上官殿こそ、お暇そうですね」

そのモローの言葉に、上官は人の良さそうな中年の顔を和らげて、笑った。

「まあ、人の上に立つっていうのは、そういうものなのさ。こうして、何事も滞りなく物事が推移する以上は、何も言うことがない」

甲板の上で、海の男の一人が、荷物を取り落とした。彼の取り落とした箱の中には、琉球特産の柑橘系の果物がたくさん入っていたようで、甲板の上に、その果物がバラバラと転がった。柑橘の、清浄な香りが辺りに広がった。けれど、そんなことには気を留めず、上官は続けた。

「さて、モロー。これから君は、さらに暇になるな」

「は？ どういうことですか？」

この上官は、もったいぶった喋り方をするという悪癖がある。単刀直入に言ってくればいいものの、こういう風に、今ひとつ先を見せないのである。モローはいつもこの上官にイライラするもの、かといって言挙げするわけにもいかないので、とりあえず黙っておく。

上官は、ようやく本題を切り出した。

「君は今、剥製の整理も任務のうちに入っているだろう？」

「ああ、そうですが」  
すると、上官は続けた。

「その剥製の整理が、君の手から離れることになった。上からの命令でな、君の仕事量が多すぎるとのことで、整理だけでも他の人間にやってもらうことになった」

ありがたい話だ、とモローは思った。

確かに、今までモローはかなりのオーバーワークだった。“動植物の収集”という任務、言葉にすればただそれだけではあるが、その言葉の背後には、膨大な煩雑が潜んでいる。動物を収集すれば、まずは報告書を書かねばならない。そして、下手にせよ絵を残し、そして、出来ることならば剥製を作るべきだろう。植物を収集した場合も同様。ただ、動物と違うのは、剥製を作るのではなく、押し型を作るという瑣末な違いにしか過ぎない。そうして作り上げられた“資料”を、今度は整理しなくてはならない。これはこの棚、あれはあの棚……と分類していくのである。いかに、「学術的興味」などと取り澄ましてみても、そういう作業は煩雑以外の何者でもない。

そこで、と上官は前置きして続ける。

「剥製の整理、後任者が決まったんだ。そこで、その後任者に、仕事の引継ぎを願いたい」

なるほど。そういうことか。

納得したモローは、上官にその後任者がいる部屋を教えてもらった。やはり、上官はまどろっこしくその部屋までの道筋を示し、そしてそれを示し終えると向こうに行ってしまった。

上官に言われた通りに、その後任者の部屋の前まで歩いた。そこは、一人部屋だった。普通、船における部屋というのは、大抵は多人数に割り当てられるものだ。つまり、この部屋の中にいるのは、かなり高位にある乗員ということになる。

モローは、扉にノックを加えた。

「はい、どうぞ」

中から、籠った声がした。どこかで聞いたことのある声だな、と首を傾げながらモローは扉を開いた。

すると、その部屋の中には

見慣れた人間、ハイネが居たのだ。

「ハ、ハイネ?! どうしてここに？」

モローの言い分に、椅子に座りながら絵を描いていたハイネは唇を伸ばしながら反論する。

「だってここ、僕の部屋ですけど」

「な、なんだって？」

思わず耳を疑うモロー。ハイネはため息をつきつつ続ける。

「モローさん、申し訳ないんですけど、ちょっとこの後仕事が入っているんです。なので、お話は後でいいですか？ 実は、剥製の整理の仕事が僕に回ってきてしまったみたいで、その引継ぎが今日あるらしいんですけど……。その前任者の方が、まだやってこないんですよ」

なるほどな。モローはようやく、全てを理解した。

モローは言った。

「あ、私その前任者だ」

しばし、無言。生ぬるい空気が、二人の間に流れた。

「え!?!」

先に口を開いたのは、ハイネだった。

「モローさんが前任者だったんですか?!」

「そうだが？」

「困るんですよ、モローさん」

ハイネは、トクトクと言葉を語りだした。

確かに、僕の仕事は公式画を描くだけです。新たに仕事がつてきてしまうのはしょうがないです。何せ、僕、暇です。でも、それがよりにもよって剥製絡みなんて! ……鳥は、好きですよ、確かに。確かに大好きなだけで、死体というのは嫌いです。特に、血がついている死体なんて、絶対に見たくありません。剥製の仕事なんて、自分には向かないですよ。

その言葉に、モローは微笑んだ。

「心配するな」

そう言つと、モローはハイネを外に出るように促した。怪訝な顔をしながら、ハイネは立ち上がる。そして、外に出た。

「引継ぎだ」

微笑みながら、モローは、カツカツと薄暗い廊下を歩いてゆく。仕方なく、といった趣で、ハイネもまたその後続く。そして、その突き当たりまで歩いて、モローは振り返った。

「さて、この奥が」モローは突き当たりの扉を示した。「剥製の保管室だ」

「いや、本当に嫌なんですって」

「まあまあ」

嫌がるハイネを宥めながら、モローは扉を開いた。

扉の奥は真つ暗だった。窓を閉め切っているのだ。先に中に入ったモローは、マッチを擦った。瞬間、モローの右手を中心として、ぼつと光が浮かび上がった。それを確認すると燃えるマッチの先を、卓の上に置かれたランプの中に灯す。そうしてようやく、部屋中に光が行き渡った。

部屋中に、鳥の剥製が並んでいた。あるものは極彩色の。あるも

のは地味な色の。奇妙に嘴が曲がったものもあれば、まるで銃先のようにまっすぐと伸びたものもある。羽を畳んでいるものもあれば、羽を伸ばした状態で時を止めた鳥もあった。それらの鳥たちが、モローたちを見下ろしていた。

「ほら、これが剥製だ」

ハイネは、そんなモローの言葉を聞いていなかった。鯨油特有の甘い香りに包まれた部屋の中で、ただぼおっと鳥達を眺めていた。構わず、モローは続けた。

「どうだ、剥製というのは、美しいものだろう。剥製というのは、死体ではない。死体から皮を剥いただけのものでもない。一瞬の美を、半永久的に保存しておく手段なのだ」

「……すごいです」

もごもごと、ハイネは言葉を重ねる。まるで、形に出来ない言葉を無理矢理に口に行っているかのようなようだ。

ハイネは、続けた。

「確かに、この鳥たちには、“死んでいる”感じがしないです。まるで、何気ない一瞬に、凍って固まってしまったみたいに」

「褒めてもらって嬉しいよ」と、モロー。「ここにある剥製は全て、私が作ったものだからな」

モローは、部屋の隅にあった剥製を持って、卓の上に置いた。白を基調とした、けれど所々にオレンジが混じる鳥。その鳥が、羽が折りたたまれた状態で立っていた。

その鳥の姿に思い至つたらしい。思わずハイネは叫んだ。

「あれ？ この鳥、この前モローさんが持ってきてくれた……」

彼の言葉を先回りして、モローが言った。

「私が撃ち落した、“A f o - D o r i”だ。ようやく剥製に出来たんだ。しかし、この鳥、あまりに羽が大きくてね、羽を広げた状態では、剥製に出来なかった」

その白い鳥は、モローを見据えていた。その鳥の黒い目が、ランプの灯に照らされて、オレンジに輝いていた。その瞳には、モロー

を恨んでいる風はなかった。ただ、遠い空を眺める旅人のような目をした、白い鳥の姿でしかなかった。

「血の跡なんて、全然ないですね」

その鳥をまじまじと眺めつつ、そう呟くハイネ。その子供っぽい仕草に、モローはおかしくなってしまうてその相好を崩した。

「当たり前だ。血の跡なんかは皮を剥ぐ際に洗浄してしまうから消えるし、傷跡も縫合して分からなくしてしまう。死の痕跡を全て隠してしまうんだ」

ほおー、と、まるでおじいさんのような嘆息を上げた後、ハイネは微笑んだ。

「これなら、僕にも勤まりそうです」

「そうか、よかった」

モローも微笑んだ。

大丈夫、と分かってからというものの、ハイネは部屋の中を歩き回った。そして、モローに「あの鳥はなんですか？」とか、「この鳥はどういう種類なんですか？」とか質問を飛ばしてくる。この質問に、モローは出来る限りで答える。「ああ、それは新種だ」とか、「燕などの種に属するものだ」と、逐一答えた。そして、その質問の答えが出るたびに、ハイネは感嘆の声を上げた。

そして、部屋中を物色していくうちに、奥にまで突き当たってしまった。

その奥には、扉があった。

鉄製と思しき扉で、冷たく光っている。しかも、枠の辺りは鋸止めさえされていた。嚴重な扉、というヤツだ。

「あ、モローさん！」

調子に乗っているハイネは、扉に手を掛けながらモローに声をかけた。

このとき、モローは卓の上で、ハイネに渡すべき書類をまとめているところだった。ハイネの動きを逐一追っているわけではなかったのだ。なので、

「ん？ なんだ？」

と、生返事を返すに留まってしまった。

飛び跳ねた声で、ハイネは質問を続けた。

「この扉の奥には、何かあるんですか？」

この扉？ モローはしばらく考え込んでしまった。この部屋には、扉は二個しかない。一つは、出入り口。もう一つは……。

その、「二個目の扉」によろやく思い至ったモローは、ハイネに向かつて叫んだ。

「そこは開けるな！ 少なくともお前は！」

けれど、その言葉を投げ寄越すのが、一瞬遅かった。もう既に、ハイネはその扉を開いてしまったのだ。

その次の瞬間、モローの耳に悲鳴が響いた。

そして遅れてドシャ、つという鈍い音が、モローの耳に届く。

おもむろにモローは立ち上がり、ハイネの方に向かう。案の定、二個目の扉の前で、ハイネは大の字に倒れている。見ると、口からブクブクと泡を出して、「血、血、血……」と、まるで悪鬼のように呻いている。白目を剥いているのが、様子を伺うモローには恐ろしい。

モローは、頭を掻きながら言った。

「済まない。言いそびれてた。そこは、剥製の制作室なんだ。絶対入るなよ、って注意してやるべきだったんだが……、スマン」

白目を剥くハイネに、モローは十字を切った。

ハイネを部屋に運んだあと、モローは自分の部屋に戻った。

モローの部屋も一人部屋で、しかもハイネと比してもなお広い部屋を宛がわれているのだが、それでも狭い。と、いうのも、モローの部屋には、動植物の参考書や標本、あるいは自分が発見した新種の植物など、自分の目にしか触れさせたくない物を置いていて、それが部屋の許容限界をとうに超えているからである。まさに、立錫の余地も無い、というべき趣の部屋の中を、すり抜けるように入っていくモロー。そして、一番奥に置かれている、ウォードの箱の前に立つ。

見れば見るほど、変な植物だ。モローは、心の中でそう毒づく。ウィリアムズの“隠れ家”にあったあの植物を、自分なりに調べてみたのだ。母国アメリカから持ってきた、虎の子の植物事典を引っ繰り返して、その植物の種を比定しようと努めた。だが、ダメだった。

植物に限らないものだが、大体、事物には定義がある。例えば、哺乳類であれば、“脊椎動物のうち、恒温動物であって概して胎生”というのが定義となる。そういう様々な、そして細やかな定義があつて、そして、その定義たちを新種の動物に当てはめていくことで、それがどういふ種の生き物なのかを判断するのである。

だが、この植物にはまるでそういう作業が通用しない。見た目は、シダ植物のそれなのだ。なのに、シダ植物である条件を満たさない。コケ植物のような性質を見せるかと思えば、裸子植物の特徴を持つている。かと思えば被子植物らしさを見せるときさえあるのだ。

確かに、時折そういう、「奇妙な動植物」に出会うことがある。けれど、ここまで厄介な例は、そうそうあつたものではない。何せ、アテをつけることさえできないのだから。

「なんなのだ、お前は」

モローは思わず、その植物に話しかける。だが、その植物は箱の中で密やかに呼吸をするばかりで、一向にモローの質問に答えようともしない。重そうに、頭を垂れるばかりだ。

「お前のような、不可思議な植物に出会ったことがない。本当に、お前はなんなのだ」

再度の質問にも、当然その植物は答ええない。ただ、シダの葉のよ  
うな葉を、もてあまし気味にしているばかりだ。ウォードの箱を、  
決して手狭に感じている風は無いが、かといって広々と使っている  
風でもなかった。ただ、その植物は、文句がないかのように、ただ  
伸びている。

この植物のために、観察日記をつけよう。

そう、モローは心に決めた。

そんなモローの決心に賛成しているのか、それとも重い頭に辟易  
しているのか、植物は頭を垂れるばかりだった。

結局、出航までの5日間のほとんどは、ハイネへの仕事の引継ぎ  
で終わってしまった。

実はこの間、一悶着あったのだ。詳細に書くことはしないが、あ  
えて書くとするならば、あの血を見ると倒れてしまうドイツ人が、  
今更この仕事に難色を示した。「となりに腑分け場があるような仕  
事なんて、したくないです！」とわがままを言って聞かなかつた。  
そのドイツ人を説得するのに丸三日かかり、その説得が済んだあと  
の仕事の引継ぎは一日で終わった、という次第だった。

そうして、過ぎしているうちに、船の準備が終わったのだろう、  
錨が上げられた。

「おお、なかなか、快適な旅だなあ」

海風に当たりながら、ブラウンは言った。

甲板の上は、色々と騒々しかった。帆を操る甲板員たちや、航海  
計画を定めんと測量士たちが、右に左にとせわしなく動いている。  
その彼らの尽力で、船は海を割って進んでいる。

その様子を眺めながら、モローは答える。

「ああ、この時期には、あまりこの地方の太平洋は荒れないらしい

「からな」

「太平洋？」 ブラウンは頓狂な声を上げた。「太平洋、って、ア  
レか？ アメリカ西海岸に広がる海か？」

「そうだが、とモローが答えると、ブラウンは目を見開いた。

「は？ 太平洋ってそんなに広いのか！」

「どうやら、ブラウンは最新の世界地図を知らないらしい。アメリ  
カ大陸と日本の間には幾つかの諸島があるばかりで、大陸の類が一  
切無いことをブラウンは知らないのだ。

ブラウンは、甲板の手すりに体を預けつつ、辺りを見渡した。前  
方には、まだ陸地は見えない。それに、後方にも、既に陸地は見え  
なかった。ただ、青い海が続くばかりだ。

「しかし、アンタも大変だな」

ブラウンは、モローを眺めつつ言う。

「何がだ？」

「聞き返すモローに、ブラウンは言った。

「船の上だ、っていうのに、まさか土いじりとはな」

船の甲板、後方の一角。そこには厚く腐葉土が入れられている。

そして、その上に各種植物が植わっていて、それをモローが今、世  
話をしているのである。剪定ハサミを手持って、大体背丈ほどの  
高さがある、要らない枝を切り落としているところのモローだった。

モローは、額の汗をぐいと拭きながら、続けた。

「はは、これが私の仕事だからな」

「しかし」

「ん？」

着ている安物そうなコートの襟を掴みつつ、ブラウンは言った。

「そんな格好で寒くないのかよ、モローの旦那」

航海一日目、どうやら舳先が北に向いているらしい。出航のとき  
の琉球は、まるで春先のような暖かさだったのだが、半日も経って  
くると、気温に変化が訪れ始めた。まるで、空気が入れ替わったか  
の如く、猛烈に寒くなってきたのである。

だというのに、モローは立て襟のシャツをたくし上げ、そしてズボンもたくし上げていて、見た目にも寒々しかった。ブラウンなど、冬に着るような厚手のコートをまとっているというのに、である。

ブラウンの疑問に、モローは答えた。

「ああ、仕事をしている分には暑い。私は大丈夫だ。だが」  
「だが？」

モローは顔をしかめて言う。

「植物にとっては、かなりマズい気候だな」

「へえ？ どういう風に？」

「まず、第一に湿気だな」モローは苦々しげに呟く。「アメリカから持ち込んでいる植物は、割と乾燥帯の植物だ。だが、この地方はかなり湿潤な環境らしい。ここにある植物達が、影響を受けなければいいのだが。それに、湿気の多いところでは、押し型が上手く行かなくてな、その点の心配もある」

ふんふん、と適当に相槌を打つブラウン。きっとあまり意味が判っていないのだろう。そんなことに構わず、モローはさらに言葉を継ぐ。

「そして、第二はやはり、この寒さだ」

「寒さ？」

ブラウンの言葉に頷いて、モローは続ける。

「向こうの冬が、どれほどの寒さかは分からない。だが、霜が降りるようだと危険だな。葉が、枯れてしまう」

「対策は、あるのかい？」

そのブラウンの質問に、モローはYESともNOともつかない反応を見せた。

「背の低い植物ならば、布で覆いをすればどうにかなるだろう。だが」

モローは背丈ほどもある植物を眺めながら、続ける。

「こんなに背が高くなってくるとな、さすがに覆いをするわけにも  
いかない。大きな植物というのは、しなやかさが無いから、無理し  
て覆いをしてしまうと、幹がポキッといってしまっ」

まるで、子供を見るような目で、植物たちを眺めるモロー。

しばし、物思いに沈むモロー。そして、つられて物思いに沈むブ  
ラウン。

「あ」

そういえば、という風に、ブラウンは顔を上げた。

「なんだ？」

「そうそう、アンタに見せたいものがあるんだ」

と、ブラウンはズボンのポケットをまさぐる。目的のものを探り  
当てたのか彼はニヤリと笑い、ポケットから手を引き抜いて、モロ  
ーのそばに寄る。そして、その手をモローの前で開いた。

彼の手の中には、石が入っていた。ブラウンの大きい手に収まる  
程度の大きさだった。その石には、妙な模様が刻まれていた。

「ん？ これは」

モローは、さらに仔細にその石を眺めた。その模様、最初はど  
う性質のものか判らなかつた。だが、観察していくうちに、それ  
が葉の形を象っていることが分かつた。葉脈だけが、まるで刻印の  
ように残っているかのようだ。

「ああ、これは葉っぱの化石だな」

モローは呟いた。

「化石？」

その言葉に、モローは続けた。

「動植物の屍骸の成れの果てだ」

「でも、植物にも化石なんてあるのか？」

ブラウンの、素人丸出しな疑問に、モローは答える。

「はっはっは、この使節団の旗艦・サスケハナだって、植物の化石で動いているんだぞ？」

「どういう意味だ？」

首を傾げるブラウンに、モローは手短かに答える。

「石炭っていうのは、昔の木が化石化したものだと言われているんだよ」

「へえ」

まるで、自分には関係ねえや、とでも言いたげな、ブラウンの呟きだった。そして、彼はこんなことを言った。

「なあ、その化石、いるかい？」

どうということだ、と聞くと、ブラウンはこの化石を手に入れた経緯を話した。

彼の話に寄れば、これを見つけたのは甲板員らしい。たまたま一番の日に、琉球本島の森の中に入ったところ、足元に変な石があるのを発見した。見れば、葉っぱのような模様が刻まれている。これは面妖なものがあるものだ、と持ち帰ったまではよかったが、その甲板員、その日の夜から熱病に襲われた。その病気が結局回復せず、今回の使節には参加せず、アメリカの琉球キャンプの留守組に組み込まれてしまった。で、その甲板員の噂を聞いたブラウンがその石に興味を持ってその人に譲ってもらった、ということらしい。その甲板員曰く、「あの石は、不幸を呼ぶ石だ。そうに違いない。こんなもの、もって行くがいいさ」とのことだった、という。

「アンタが興味を持つと思ってな、譲り受けたんだ」

そう言われてしまったのは、要らないものも「要らない」とは言いにくい。実を言えば、葉っぱの化石など、モローにとっては専門外の代物なのだ。モローの専門はあくまで、“「現在生きている「動物植物」なのだから、かつて存在した植物など、興味が沸くものではないのだ。けれど、ブラウンの好意を袖にするのは気が引けるし、“どこで収集したか”が明らかである化石ならば、その価値の判る人間にとっては垂涎の品であろう、と見当をつけたモローは、その

石を受け取る事にした。

「ありがとう」

そう礼を言いつつ、アメリカに帰ったら知り合いの古生物学者にこれを見せよう、と、既にその化石の行く先について算盤を弾くモローなのだった。

「いいってことよ！」

そんなモローの計算を知らないブラウンは、笑顔を浮かべ、踵を返した。そして、手をヘラヘラ振りながら向こうに行ってしまった。モローは、受け取った化石を、ポケットに突っ込んだ。

結局、甲板の植物の世話に、ほぼ一日を費やしてしまった。

航海中というのは、植物にとってはかなり不安材料が多いのだ。海風や塩害、急激な気候変動、あるいは水分の調節。それらが、陸上での栽培以上に気を使わせる要素となってモローの両肩にかかるのである。海風の向きを計り、塩害の心配をし、水をやりたりするうちに結局一日が終わってしまうのである。

モローは、自分の部屋に戻った。

汚れてしまった立て襟のシャツを脱ぎ、同じく汚れてしまったズボンを履き替える。そうして、部屋着に着替えたモローは、ごちゃごちゃとした部屋の、一番奥に進んだ。

一番奥には、あのウォードの箱が、厳かな佇まいのまま座していた。そのウォードの箱の中では、まるで外の気候など無関係だよ、と言わんばかりに、正体不明の植物が確かに息づいていた。心なしか、その葉が少し揺れた。まるで、モローの来訪を喜ぶように。

その様子をばおつと眺めながら、そういえば、とモローは思い至った。脱いだまま放っておいてしまったズボンの元まで歩く。そして、そのズボンのポケットをまさぐった。そのポケットの中から、ブラウンから貰った葉の化石を取り出す。そして、ウォードの箱が乗っかっている卓の上に置いた。

椅子を持って、ウォードの箱の前に置くと、モローはその上に座

る。化石と並んだウオードの箱は、何の感慨も無さそうに佇む。眺めているうちに、部屋が暗いことに気づき、ランプに火を灯した。鯨油の甘い香りと共に、部屋の隅の方に屯していた闇が、さらに隅に押しやられた。

ウオードの箱のガラスが、灯を反射する。

「なあ、お前は誰なのだ」

モローは、箱の中の植物に話しかける。けれど、その植物は何も答えない。

ため息をついてから立ち上がったモローは、植物辞典をパラパラめくる。そして、ウオードの箱の周りを歩きながら、まるで聖書の一節を垂れる牧師のように、言葉を継ぐ。

「お前は、どの植物にも属さない。だというのに、どうしてお前はそうして存在できるのだ？ なぜ、お前はこうして私の前に佇んでいるのだ？」

けれど、その植物は何も答えない。

また、椅子の上に座ったモローは、ノートとペンを引き寄せた。

そして、書いた。

☐ 2月7日

植物事典を眺めても、植物の正体がまるで判らない。これでも、当代一流の植物事典を持ってきていたはずなのにも関わらず、である。

シダの一種だ、と評価してしまえば、それまでのことだ。この植物をシダと表現してしまえば、この植物はシダとして世間に認知されるのだろう。しかし、それは私には不適當な事に思える。何故なら、この私の目の前にある植物には、シダにない特徴を有しているからである。

学問の基本は常に、「疑わしきは論せず」である。まだまだ、私の手元には、この植物に対する情報が欠乏している点は否めない。これからも、観察を続けることで、それらの情報を集めていきたい。それから、この植物の比定作業に取り掛かったとしても、むしろそ

れは学問の厳密性のためには正しい道筋であろう。』

困ったものだ。モローはため息をついた。

まだ、私が書けるのは、これ程度の情報でしかない。せいぜい、“分からない”という事を正直に吐露するしかない。そして、“学問の厳密性”などといって、分からないことを棚上げする事しかできない。

モローはため息をついて、ノートを閉じた。そして、ウォードの箱の近くに置いた化石を手にとりてしばし弄んだ。ランプの明かりに照らされた化石は、まるで植物の押し型のように、永遠の美を誇っていた。この化石を譲り受けてよかった、とモローは思った。そんなこんなと過ごすうち、強烈な眠気に襲われたモローは、ランプの灯を消すとベッドにもぐりこんだ。

次の日は、嵐だった。

朝一番に、ある命令が通達された。

「本日、操船に関する任所についている者以外は、自室にて待機すべし」

つまり、事実上の戒厳令ということだ。

任所がないモローを始めとして、戦闘要員をも自室待機が言い渡されたのである。それが言い渡されたのは朝食を食べた際の食堂だったのだが、その行き帰りの際にモローは外の様子を眺めることが出来た。

外は雨だった。とは言っても、霧のような雨が降るばかりだったが、むしる風の勢いが強かった。吹き付ける風がモローのシャツを強く揺さぶって、海に消えていく。灰色の海は、海神の怒りを表すかのように、ウネリを上げていた。

だが、それほど船は揺れなかった。

確かに普段よりは揺れるものの、我慢できないほどでもない。気候が低く推移していることもあって氷雨と形容すべき雨ではあったが、人間の行動を掣肘するほどのものでもなかった。

なので、モローは思い切って行動を開始した。

船の居住部の一番奥手、高官達の部屋がある区域まで歩いていった。下士官や作業員の部屋がひしめく区域の廊下は、粗末な板で床を打たれているだけだというのに、高官の部屋のある区域に入ると、その造りがまるで変わり、まるで汽車の一等車両のように、レッドカーペットが敷かれていた。

その一番奥の一角に、目的の部屋があった。

金属で縁取りされた扉。そして、上等そうなドアノブ。モローにあてがわれている部屋も、甲板員たちの部屋と比べればはるかに上等なものだった（何せ、甲板員たちは五人で一つの部屋を共有しているくらいだ）が、それでも見劣りがするくらいだった。その格の差を、扉の佇み方だけで理解できるのだから、モローの眼の前にある部屋というのは、よほどのものなのだ。

その扉の前に立ち、モローはその扉をノックした。すると、部屋の中から返答があった。

「どうぞ、入ってください」

その声に導かれるように、モローは扉を開いた。

果たして部屋の中も、そもそも部屋の趣が違った。赤いカーペットが敷き詰められているし、ベッドだってモローの部屋にあるような安物ではない。ベッドの柱に獅子の彫刻が成されていて、しかもその足も猫のような装飾が成されている。一見してみても、かなり手の込んだものだ。

そのベッドの近くにある安楽椅子の上に、その男はいた。

「ああ、ようこそ……、って何だ、モローではないか」

それは、ウィリアムズであった。彼はいつも通りに黒いフロックコートをまとっていた。

ドアを閉めて部屋に入ったモローは、ウィリアムズに会釈をした。すると、ウィリアムズはいきなり愚痴りだした。

「まったく、船旅などするものではないな。こうして嵐の日には、暇を持て余すことになるのだから……、と、失礼。こんな愚痴、するだけ無益というものだ」

「そうだな、ウィリアムズ」

モローが呆れ顔をしているのに気づいたのか、それとも愚痴が過

ぎると思ったのか、ウィリアムズは話の方向を変えた。

「あれ？ おかしいな。今日、操船任所乗員以外の乗員は、外出が禁止のはずだが？ なぜ君はこうして外出しているのだね？」

そのウィリアムズの質問に、モローはほくそ笑んだ。話が早い、と。

モローは本題を切り出した。

「実は、ウィリアムズを見込んで、話があるんだ」

「ほう？」

元々、組織において高位にある人間というのは、頼りにされるのを好む人間である。ウィリアムズなどはまさにその典型。こうして、“見込んで”などと言われて、嬉しくないはずはない。思わず、彼の顔から笑いがこぼれる。そして自然と、話を訊く体勢に入る。

モローは続けた。

「ウィリアムズは、提督殿に直接提言を出来る立場にあるのだろうか？」

「ペリー提督に提言？ ああ、私は通訳官だからな。通訳官の役得のようなもので、一応提督殿とは仲良くやっているぞ？ ……ま、仲良くしたいかは別として、だがな」

腕を組むウィリアムズはちよつと、安楽椅子をこいだ。“話の仕方や、顔をちよつと歪めているところを見るに、どうやらウィリアムズは、ペリー提督殿と馬が合わないようだ”、とウィリアムズを眺めながら、モローは冷静に判断していた。けれど、ペリー提督殿と自分をつなぐのは、今眼の前にいる男しか居ないのだから、と自分を励ましながら、言葉を先に進める。

「実は、ペリー提督殿に、あることをお願いしたいのだ」

「あること？ 能書きはいい、早く本題を話したまえ」

モローは、言い放った。

「私の外出禁止命令を、解いてもらいたい」

「外出禁止命令を？ なぜ？」

ウィリアムズの言葉に、モローは言葉を返す。

「今日の気候、見た感じでは作業に支障をきたすほどのものではない。風は強いが、けれど注意をすれば危険なものでもあるまい？ だからこそ、今のうちにやっておかねばならない仕事があるのだ」

「仕事？ …… ああ！」

ようやく、思い当たるものがあつたらしく、ウィリアムズは大きさに相槌を打った。

モローは続ける。

「ようやく分かったか？ そうだ、この天気、とりあえずは好転すまい。これから、どんどん悪化の一途を辿るだろう。ならば、気象がまだ小康状態の今、この船にある菜園に対し何らかの措置を打っておきたいのだ。だから、外出禁止措置を解除してもらいたいのだ」  
「なるほどな」

ウィリアムズは頷いた。しかし、ふつと笑った。

「しかしそれは、別にペリー提督殿に通さなくてもいい話だよ、モロー」

「何だつて？」

モローは反問した。すると、ウィリアムズは安楽椅子から立ち上がり、モローの前に立つ。そして、自分の言葉の種明かしを披露した。

「確かに、外出禁止命令は、ペリー提督殿の名前で出されたものだ。それに事実、提督殿の命のようだ。だが、あれは実際のところ、各船の船長の判断で受理されたものだ。だってそうだろう？ ペリー提督が乗っているのは、旗艦・サスケハナだぞ？ この船の指揮権は、この船の船長にあるのだから」

ペリー艦隊は、“艦隊”の名の通り、四隻の船で以って構成されている。

ペリーの乗る旗艦であり蒸気船の「サスケハナ」。同じく蒸気船の「ミシシッピー」。帆船「プリマス」。そして、モローたちが乗船している帆船「サラトガ」である。

艦隊というのは、綿密に情報が結ばれている。それは当然の話で、

最早一つの社会になってしまっている「船」を同じ方向に動かすためには、「情報の共有」というつながりが無ければならないからだ。もちろん、艦隊の命令系統も、使節団の筆頭であり艦隊の司令官であるペリーを筆頭に、ピラミッド構造を描く。

だが、艦隊には、司令官の他に、司令官に匹敵するような権力者がいるのである。

各船には「船長」と呼ばれる職掌にある者がいる。船長というのは船においては絶対的な権力者である。もちろん、司令官に比すればその権力は抑圧されてはいるものの、しかし船という現場において、という条件付であれば、むしろ司令官よりも強い権限を持つ。

人員の配置やその使い方、などというのはまさに船長の権力が及ぶ範囲なのだ。

諭え司令官が、「操船要員以外は外出禁止！」と命令したところで、現場の権力者である船長ならば、「我が船特段の事情により、その命令は無効とする」と突っぱねることが出来るのである。

ウィリアムズの謂わんとしているのは、その事なのだ。

「ああ！なるほど。そういうえばそうだな」モローは納得した様子で頷きながら、さらに言った。「じゃあ、この船の船長に話を通してくれないか」

「構わんよ」

そう言ったが早いか、ウィリアムズはモローの脇をすり抜け、扉を開いた。そして、廊下に出ると振り返り、心配顔のモローを笑い飛ばした。

「心配無用だ」

微笑みながら、ウィリアムズは扉を閉めた。

そうして待つこと五分、あっという間に彼は部屋に戻ってきた。満面の笑みを浮かべたまま。

「どうだった？」

モローが訊くと、ウィリアムズは笑顔のまま答えた。

「うん、大丈夫だ。君の外出許可は確かに下りたよ。ただ、条件が

あつてなあ……」

“条件”というくだりから、ウィリアムズの顔がいやらしく綻び始めた。なんだか嫌な予感を感じつつモローが話を先に促すと、ウィリアムズはこれ以上ないようないやらしい笑みを浮かべつつ、答えた。

「監督者が同席のこと、とのことだ」

「監督者？ どういうことだ？」

モローの問いに、ウィリアムズはさらに続ける。

「君が今日、仕事を遂行するためには、危険が付き物なわけだ。それはそうだな、操船要員以外は外出禁止なわけなのだから。そこで、君が仕事をするときに、監督者をつけるとの命令だ」

「まだ話が見えないが」

「つまりは」ウィリアムズは、これ以上なく相好を崩した。「私が同行しないことには、君は仕事が出来ない、ということだ！」

なんてことだ。モローはかぶりを振った。

「なんだか、頭痛がしてきた」

「おやおや、それは大変だ」ウィリアムズは、心なしか体を傾がせているモローの背中を押した。「早く仕事を終えてしまおうではないか」

そうして、この日は一日、甲板にある菜園の世話をすることになった。

普段だったら一番楽しいことなのだがな、と、したり顔でこちらの様子を眺めているウィリアムズの顔を眺めて、モローはため息をついた。けれど、顔を見るのも癪なので、とりあえず杭を埋める作業に没頭する事にする。

モローがこんなにも憂鬱なものには、理由がある。

植物の世話というのは、かなりその世話人の流儀が出る仕事である。例えばモローなどは、ハサミで枝を切る前に、枝の根元に縄を縛るようにしている。それは別に意味があるわけではないにせよ、けれどそれは植物に携わる人間であるモローの“流儀”なのだ。そ

して、そういう“流儀”で満たされた菜園というところでは、その菜園の管理者が持つ技術の秘密全てを見渡すことが出来るのである。

これを、素人に見せることには何の気後れもない。なぜなら、素人連中には、“流儀”を見切るだけの目がないからである。だが、見せる相手がその道の人間となると、事情はまるで異なる。目の肥えた玄人の視線を、同業者は嫌がるものなのだ。

事実、さつきからウィリアムズは、植物の植樹状態や保持の仕方あるいは土の盛り方などを仔細に観察し、時折、手にある紙に書き写している。きつと、盗める技術は盗んでしまおうと躍起なのだ。研究熱心というか、なりふり構わぬというか。

「まったく、モロー、君はすごいな」

紙の上でペンを躍らせながら、嘆息気味に言葉を継ぐウィリアムズ。

「何がだ」

杭を地面に打ちつけながら、モローは不満げに訊く。カツンカツンという、杭を打ちつける音があたりに広がる。けれど、弱雨のせいで、その音はくごもって聞こえる。

近くにある蔓植物の葉を撫でながら、ウィリアムズは続ける。

「例えば、この蔓植物。本来ならば細い柱を一本立てるところ、升目のように、細い柱を縦横に交差させるとは。そうすれば、確かに面的に蔓を伸ばさせることが出来るな」

ウィリアムズの言葉通り、チエスの目のように交差した柱に蔓が巻きつき、まるで一つの壁のように蔓が茂っている。まるでウィリアムズの言葉に恐縮するかのように、蔓は下を向いていた。

お言葉だが、と前置きして、モローは不機嫌に反論する。

「そんなもの、随分前に開発された技術だ。それこそ、紀元前にはあった技術だろう」

「ふふ、バレたか」

ウィリアムズは悪戯っぽく笑った。その顔に、さらに不機嫌にな

るモローは、苦々しげに皮肉を言う。

「で、参考になったか？ 私の菜園は」

「それはもう」

モローの皮肉に気づく様子もなく、ウィリアムズは正直に言葉を返す。いや、あるいは、モローの皮肉に気づいていて、あえてさらに皮肉を返してきたか。どっちにしる、鼻持ちならないことに変わりはない。

杭を思いっきり打ち続けながら、モローはウィリアムズに言葉をぶつける。

「おい、ウィリアムズ、教授料代わりに、仕事を手伝う気はないのか？」

すると、ウィリアムズはしれっと答えた。

「悪いのだが、私の仕事はあくまで君の仕事ぶりを観察することにあつてね。ああ、残念だ、もし私に“君の仕事ぶりを監督する”という仕事さえ無ければなあ」

芝居がかった口調。悪戯っぽい顔を一切崩さない。

「ふん、手伝う気なんか、最初から無いくせに」

モローが苦々しげに言うと、ウィリアムズは笑った。

「バレたか」

結局、その日は一日かけて菜園に嵐対策のための設備を取り付けた。具体的には、背の高い植物の周りには杭を打ちつけてその杭と植物を縄で結び、背の低い植物には麻布で何重にも覆いをしたあとその布の端を杭で固定した。植物に水をやったり枝の様子を見て肥料の配合を工夫したり、という作業が好きなモローにとっては決して面白い仕事ではないが、けれどそれは、嵐のためにやらねばならない仕事だった。その仕事の横で、ウィリアムズがニヤニヤと仕事を見ている。そして、時折何かをメモしている。

結局、その日の仕事は日が暮れるまで行なわれ、普段つけている日記や、正体不明な植物の観察日記も書けないまま、モローはベッドに潜った。半ば、自棄気味の不貞寝だったことは言うまでもない。

その次の日、モローは一日ベッドの中だった。

朝起きたとき、背中に妙な悪寒を感じた。何だこれは、と頭をもたげると、額がどうにも熱い。もしかと思えば上体を上げてみると、眩暈がした。そんなはずはない、とフラフラした足取りで食堂に行ってみると、皆が皆、モローに口々に言った。

「おい、顔が真っ赤だぞ？」

「熱でもあるんじゃないか？」

「なんだか、足もおぼついてねえな、オイ」

どうやら、客観的に眺めても、モローは風邪を引いているようだった。

そんなモローの様子を見て、たまたま朝食を取っていた船長が、つまらなそうに言った。

「モロー君。今日、君は外出しちゃ駄目だよ。もちろん、昨日までの外出許可は剥奪だ。誰かに風邪をうつされても困るからね」

その言葉に、モローは反論した。

「で、でも、植物の世話があるんですが……」

「安心したまえ」目の前にある黄色いスープをすすったあと、船長は言った。「外は大雨だ。昨日とは比べ物にならない大嵐だ。どっちにしろ、今日の状況では、君に外出許可を与えられないだろう」

そう船長が言い切った瞬間、床が大きく傾いた。床に取り付けられている机や椅子はまるで動かなかったものの、その上に乗る人間は、その動きに合わせて少し揺れた。ちなみに、足元が元々フラフラだったモローは、床に盛大に倒れこんでしまった。

「な、言っただろう？」

船長は、倒れこんだモローの顔を覗きこんで、にっこりと笑った。そんなこんなあって、結局モローは部屋でおとなしく寝ていることにした。「船長の言うとおり、きつと外は大嵐なのだろう」とモローが納得するくらいに、船が何度も傾いでいたからだ。その揺れの折に、船の何処からか、まるで背骨が軋むような音が聞こえる。

その不吉な音が、モローの心を折ってしまったのだった。

ベッドに寝転びながら、モローは天井を眺めた。天井の木目がぐるぐると渦を巻くような光景が、モローの眼前に広がっている。イカンイカン、と頭を振って、今度は横を見た。横には、紙の束が乱雑に置かれていた。アメリカ力を出る前に出た、植物学の論文集だ。

この艦隊に参加する前に買い求め、こうして読んでいるのだが、論文というのは往々にしてつまらないもので、あまり頁が進んでいない。それはそれでイカンイカンと頭を振ったモローは、とりあえず目を閉じることにした。だが、目を閉じたら閉じたで、まるで瞼の裏の闇が渦を巻いているかのような光景が広がる。結局気分が悪くなって、また目を開く。

そんなことを何度も繰り返すうち、やがてモローの目に、例の植物が目にとまった。

あの正体不明の植物は、雨だというのに元気そうだった。瑞々しい葉。けれど、ほどよく乾いた茎。そして、風などに揺れず、ただ頭を垂れていた。

いや、正確には、あの植物には、外界の影響などまるでないのだ。なぜなら、あの植物はウオードの箱で守られているからである。ウオードの箱というものは、内側でしか水のサイクルがない代わりに、外界とは完全に隔離されている。“自然”を作り出すものに他ならないのだから。

モローは呟いた。

「本当に、見れば見るほど不思議な植物だ」

お褒め頂き恐悦至極、と言わんばかりに、その植物は頭を垂れている。

「お前は何処から来たのだ」

申し訳ありませんがお答えできません、と言わんばかりに、植物は頭を垂れている。

「お前は、何処に行こうというのだ」

あなたの望むところへ、あるいは、転がるほうへ、と言わんばかり

りに、その植物は頭を垂れていた。

その一方通行の問いに疲れたのか、モローは目を閉じた。そうして、眠りの螺旋階段をゆっくりゆっくりと下りていった。

結局その日も、日記と観察日誌を書くのを忘れてしまっていた。

その次の日、大問題が起こった。

大問題、とは書いたが、これはあくまでモローにとっての大問題であって、ペリー艦隊にとっての大問題ではなかった。あくまで、モロー個人のレベルで、大問題が発生したのである。

むしろ、ペリー艦隊にとっては、その日は割と問題の少ない一日だったといえる。

前日の時化の影響が残るものの、その時化も昨日ほどのものではなかったし、あと一日で日本の港に着こうという航海状況だった。正直、ほとんどの乗員たちが、嵐が去った安心感と陸が近い安心感に、思わず安堵の表情を浮かべつつ、上官の「気を引き締める！」という檄に怯えて顔を引き締めているような状況だったのである。

では、何が問題だったのか。

それは、この日の朝の、モローの部屋の様子から語りだすことによつて、はつきりと見えてくるであろう。

\*\*\*\*\*

その日の朝、モローはゆっくりと瞼を開いた。

頭をさすってみるが、特に痛みはないし、額も熱くない。前日、一日中ずつと寝ていたおかげで、ほとんど風邪が抜けているようだった。だが、まだ油断ならないと、上体を起こして頭を振ってみるけれど、まるで眩暈もしない。ベッドから立ち上がってみるが、まるで体に異常は無さそうだった。

時折、床が揺れた。だがこれは、きつとまだ船が時化の中にいるからなのだろう、と当たりをつけ、モローは軽い足取りで食堂に向かった。

食堂では、皆が皆口々にモローの回復ぶりに目を見張った。

「おいおい、一日で風邪を治すか、フツー」

「船での病気は命取りだからな、早く治すに限るけどよ」

「にしても、早すぎだよな」

やはり、その日も朝食を取っていた船長も、目を見張らせた。

「おお、ようやく治ったか。だがな、今日も外出はならんぞ」

なぜです？ と訊くと、船長はつまらなそうに応じた。

「昨日の時化は収まったが、今日は濃霧でな。不測の事態が考えられる。船長である私としても、あまり乗員に動き回って欲しくない」  
結局、朝食を食べ終わったモローは、部屋の中に缶詰となつてしまったのである。

部屋の中で、椅子に座りながら、まだ読み進んでいない論文に目を通す。その論文には、熱帯性植物の飼育方法や採集の注意点、あるいはその押し型を作る際の注意点などがまとめられていた。ふと、“寒冷地における植物の飼育法”という項目を探したモローだったが、その論文の何処を探しても、そんな項目は一切なかった。

空気が入れ替わった、とモローはふと思った。

琉球を出て、3日ほど北上したはいいが、その間に空気が完全に入れ替わってしまった。琉球の、湿り気を帯びた熱気はとうに鳴りを潜め、むしろ寒冷的な空気が立ち込めるようになっていた。部屋の中でさえ、時折息が白くなるくらいだ。

そういった気候では、植物にとって不測の事態となりかねない。霜が降りてしまったり、寒さで弱ってしまったりするのだ。このとき、船に積んでいる植物のほとんどは比較的溫度変化に強いジャガイモなどの作物だったのだが、に、してもわずか三日ほどでこれだけの溫度変化が襲うというのは、あまり好ましい事ではない。

なにがしかの、手を打たねばなるまい。

そう、モローが心に決めながら、論文をベッドの上に置いた、その瞬間だった。

ギギギギギ。

まるで、壊れたコントラバスのような音が響いたかと思うと、突

然床が大きく傾ぎだした。机や椅子は備え付けのためにまるで影響を受けないが、その上に載っている本や紙束、あるいは鯨油ランプなどが勢いよく床に雪崩れて落ちていく。一瞬後に、傾いだ床はその均衡を取り戻そうと、振り子のように反対に揺れる。その度に、床に散らばったものたちがその律動に翻弄されていく。何度目かの揺れの際に、まるでガラスが割れるような音がした。けれど、モローは“ランプが割れたのだらう”と推量して、とにかく揺れに備えて椅子にしがみついていた。

そして、そのうち揺れの幅が狭くなり、ほとんど感知できないほどにまで弱まった。ようやく、モローは辺りを見渡した。

部屋の中は、かなりしつちやかめつちやかになっていた。ベッドや机や椅子といった大きな家具は、大きな揺れに備えて床にビス止めしてあるので位置は動いていないが、それ以外のものは本来の位置を忘れて散乱していた。

きつと、強い横風にも当たったのだらう、と、とりあえず眼の前の状況に説明をつけ、モローは部屋を片付けた。

散乱していた本や紙束、あるいは集めた押し型などを、仕分けして集め、とりあえず元の位置に置く。そして、枕やシーツなどの備品はベッドの上に載せる。そうして片付けているうちに、モローはあることを思い出した。

「そういえば、さっきガラスが割れた音がしたが……、何の音だ？」

モローは、床を必死で眺めた。

実はこのときモローは、ランプが割れたものだと思っていた。なにせ、この部屋で割れ物はそれくらいしかなかったからだ。だが、ランプが割れるとは面倒な、とモローは顔をしかめた。

当時のランプの燃料は鯨油であった。鯨油というのは、元々が動物由来の物質ということもあり、あまり部屋でぶちまけたくない代物なのである。

だが、そう見当をつけて部屋を探したモローの眼の前に、やがて

無傷のランプが出てきた。

どうやら、落ち方がよかつたらしい。ランプ上部の傘部分から落ちたことで、本体に影響を与えなかつたらしい。それが証拠に、スチール製の傘部分だけは、大きくひしゃげていた。当然、その中に満たされていた鯨油も漏れ出してはいなかった。

よかつた、と、無傷のランプを手に持ちながら胸を撫で下ろすモロー。そのランプをそれ専用のフックにかけてから、次なる疑問に襲われる。モローは首を傾げる。

「では、何が割れたのだ？」

そもそも、この部屋に、割れるものなどあったか？ あつてランブくらいのもだろう……と唸りながら、モローは部屋を歩き回る。そして、部屋の一番奥にまで足を進めた時点で、ようやく思い出した。

「そつだ！ ウォードの箱！」

モローは机の上に目を遣つた。

机の上には、ウォードの箱が置かれていた。実は、揺れが多い船の中ということもあり机とウォードの箱を縄で縛つて固めておいたので、床に落ちるようなことはなかったのだ。だが、モローは一瞬にしてそのウォードの箱が既に変容していることに気づいた。

ウォードの箱の側面、ガラス部分が、大きく割れていたのだ。

「な……！？」

ウォードの箱の近くに寄るモロー。そして、ウォードの箱の内部を観察する。

その中には、例の植物が息づいていた。けれど、その茎は変な石のようなもので押しつぶされ、その形を大きく変えていた。まるで雑踏に踏みにじられる雑草のようだった。

植物を押しつぶしている石を、モローはガラスが割れた穴から手をつ突っ込んで取り出す。そして、眼の前にかざす。

その石は、ブラウンから貰つた、植物の化石だった。

どうということだ？ 手の中にある化石を眺めつつ、モローは首を

傾げる。

考えられるのは、あの揺れのときに、この化石がウォードの箱のガラスを割った、という可能性だった。だが、手のひらに収まってしまふようなこんな石くれで、分厚いウォードの箱のガラスが割れてしまふなどと、とても信じられるものではなかった。

けれど、考えられる状況は、そういう状況だった。

ありえない、と思えることでも、眼の前にその光景が広がってしまった以上、それは“事実”として受け入れられる。巨人ゴリアテを討伐したのが羊飼いの少年だったように、事実というのは改変が不能なのだ。

それに、何によってウォードの箱が割れたのか、など、モローには関係のないし、興味もない話なのだ。

むしろ、ウォードの箱が割れてしまった、という事実の方が大事なのである。

ウォードの箱というのは、外界との接触を絶つことによって、擬似的な“自然”を作り出す装置である。言い換えれば、ウォードの箱というのは、“外界と隔絶されている”ことでその存在理由を保持している装置なのである。けれど、その存在理由が、破られてしまった。何も知らない人間から見れば、ただガラスが割れただけに過ぎない。だが、その変化は、ウォードの箱の価値を奪うような変化なのである。

モローは、手にある化石を眺め、ため息をついた。

その次の日、ペリー率いる艦隊は、三浦の沖に達し、その碇を下ろした。

その日の浦賀には、小雪が舞っていた。甲板に出て、日本という異国、目的地である異国を望む乗員たちをまず出迎えたのは、この島国の冬と、冷たい小雪だった。そしてしばらくして、使節団を迎えたのは現地人と思しき人たちの山だった。現地人たちが、まるでこちらの様子を伺うようにして、海岸線に人だかりとなっていた。

「まったく、舐められたものだ」と、望遠鏡を覗きつつ、ウィリアムズが呟く。「向こうの連中と来たら、まるでこちらのことを恐れていないではないか。提督殿がこの前“祝砲”を鳴らしすぎたせいで、示威が利かなくなっているではないか？」

「まったく」と、手すりに体を預けながら、海岸線に控える現地人達を見遣って、ブラウンは頷く。「奴さんたち、まるで俺たちのことを怖がってないぜ？　まるで、曲芸団が街にやってきた、って感じだな」

海岸線に群がる現地人たちは、まるでライオンの火の輪やピエロの演技を期待している子供のように、視線をこちらに向けている。その視線は、何かに怯えている風はなかった。誰だつて、火の輪くぐりをするライオンが襲い掛かってくるとは思わないし、ピエロが突然銃を引き抜いて乱射してくるなんて思いはしない。つまりこの、この日本という国の現地人たちは、ペリー艦隊のことをそれ程度の存在だと捉えていた、ということだ。

「それはそうだろう」と、モローは続ける。「以前、“祝砲”を鳴らし続けたんだからな」

ウィリアムズとモローの言う“祝砲”とは、前回三浦沖に停留したときペリー艦隊に行なった、示威的な空砲のことである。

どうにもこの艦隊の提督・ペリーは荒っぽいところのある將軍で、「ズドンと脅してやれば、どうとでもなるだろう」と、アルコールで顔を紅潮させながら言うのだ。けれど、実弾を撃つのはさすがに躊躇われたのか、空砲を鳴らすことにしていたのだが。

確かに、最初は効果的だったようだ。以前は沿岸警備についている日本の兵士たちが一時退避するほどに向こう側を驚かせたが、それが毎日のこととなってくると、向こうも慣れてきてしまうらしい。空砲の音に向こう側が驚かなくなったのと、ペリー艦隊が恐れられなくなったのも、軌を一にしていた。

きつと、向こうの連中も、こちらが危害を加えてこないと高を括っているのだ、とモローなどは既に思っている。

ブラウンは、不意にウィリアムズから望遠鏡を奪い取った。そして、海岸線にいる人だかりに向ける。

「にしても、あいつら、変な格好だなあ。以前もそう思ったけどよ」「そうか？」

いぶかしむウィリアムズ。

興味を持ったモローは、ブラウンから望遠鏡を掠め取って、その先を目につける。

望遠鏡の中には、異国が広がっていた。まるで、昔の図版にあるベルサイユの貴族のように、髪の毛を上にかくし上げた女たち。頭頂部をそり上げて、後頭部の髪の毛を前に垂らす男たち。そして、釦が見えない装束。中には、下半身にボロ布だけをまとった男の姿さえある。

モローの目に入る風景を説明するかのように、ウィリアムズは言った。

「別に、珍しいものには思えないがな。女の装束など、国によって相当違いがあるからな。確かにこの国の男たちは頭頂部をそり上げる習慣があるようだが、それは清国でも辮髪という習慣がある。釘がない服も、東洋にはありがちのものだ」

ありがちだ、と説明されようが、やはり奇異なものは奇異だ。

ブラウンが目を細めながら海岸の様子を見遣るうち、あちらにも変化があつた。

海岸線に、左腰に剣と思しきものを二本差した男が数人現れ、鞭のようなものを持って振り回した。海岸線に集まっていた野次馬達が、まるで途中で曲芸を切り上げられた子供達のような顔をして散つていった。

モローの手にあつた望遠鏡は、またウイリアムズに戻された。

「ほう、あれは、向こうの役人達だ」と、ウイリアムズ。「あの、黒っぽい服は、向こうの役人特有のものだ。なるほど、察知が早いな」

そうウイリアムズたちが喋っているうちに、海岸線の役人達は木の柵を立て始めていた。どんどん、黒い服を着た連中が海岸線に埋め尽くされていく。

その様子に、これまで無言だったハイネが、突然口を開いた。

「これから、どうなるんでしょうか」

「どうなる、とは？」

ウイリアムズの問いに、ハイネは心配げに答える。

「例えば、これから、戦争になったりするのでしょうか」

ウイリアムズは答えた。

「正直、分かん。アメリカという国にとって、この国との通商は必要不可欠なものだ。だが、植民地化などは必要としないはずだ。だから、全面的な戦争になることはあるまい。ただ、局地的に

は、戦争になる可能性があるな。通商の道を拓くために、小競り合いはあるかも知れんな」

「そうですか……」

俯くハイネ。だが、そんなハイネを励ますように、ウィリアムズは言う。

「そう、心配するな。あちらの国には戦闘力は皆無だ。どうやら、向こうの国にはフリントロック式の銃さえないという。それに、大砲の性能も、さして良質ではないという。仮に戦をしても、こちらに死者は出んよ」

「そういう問題じゃないでしょう」

弱々しく、けれどはつきりとハイネはそう言い放った。そして踵を返すと向こうに行ってしまった。

「なんだ、アイツは」

「さあ？」

顔を見合わせたウィリアムズとブラウンは、首を傾げた。

「様子がおかしかったが」

というモローの呟きに、ウィリアムズは手を横に振る。

「何、ただ単に臆病なだけだろう」

そうかもしれない、とハイネの小さな背中を見遣りながら考え直したモローは、とりあえず、ウィリアムズに言うべきことがあることを思い出し、切り出した。

「なあ、ウィリアムズ」

「何だ？」

「実は……」

君から頂いたウオードの箱が、昨日の横揺れの際に割れてしまったのだ、と、モローは正直に白状した。そして、あの植物を守るために、手持ちのウオードの箱を貸してくれないか？ と正面切って頼み込んだ。

けれど、そのモローの言葉を聞いたウィリアムズの答えは、「N O」だった。

「悪いが、貸すわけには行かない。と、いつか、貸すだけ無駄というものだ」

「どういうことだ、と聞くと、ウィリアムズは続けた。

「だってそうだろう？ ウォードの箱というのは、外界と切り離されていることに意味があるのだ。外界の風を一切受けられないことで、あの植物は生きながらえていたのだ。……だが、君は外界と植物の間にあつた障壁を破ってしまった。一度、外界との接触が出来てしまった以上、あの植物は回復すまい。あの植物については、諦めることだ」

心なしに嬉しそうにここまで言葉を継いだウィリアムズだったが、さすがにバツが悪いと思つたのか、こう付け足すのを忘れなかつた。

「まあ、信じることだ。あの植物の生命力を」

「そうだな」

ため息をついたモローは、不意に体を預けていた手すりから躍り上がった。そして、先に部屋に戻る、という言葉の代わりに、片手を上げた。

「モローの旦那、もう戻るのかい？」

いつの間にかウィリアムズから望遠鏡を奪っていたブラウンは、海岸に向けている望遠鏡から目を離して、モローに問うた。その問いに、モローはウィリアムズの顔を憎憎しげに眺めながら、皮肉で答えた。

「ああ、部屋に戻って祈ることにするよ、植物の生命力とやらに、ね」

踵を返したモローは、甲板を歩いていった。

部屋に戻つたモローに待っていたのは、割れたウォードの箱だった。そして、その中に佇む植物だけが、モローのことを待っていた。暗い部屋に辟易して、モローはランプに灯を灯した。そうして、ようやく明らかになつた部屋に、ウォードの箱は何も言わずに、ま

るで岩のように佇んでいた。けれど、箱のガラスの反射が、昨日までのものとは少し違った。まるで、蜘蛛の糸のような光の糸が、ガラスにへばりついているように見えた。その現実離れた綺麗さに少し陶醉したモローだったが、ふと正気に返ってみれば、その蜘蛛の糸はガラスのヒビが同心円状に広がったもので、そのヒビが灯の光によって浮き上がっているに過ぎなかったのだ。そして、その“蜘蛛の糸”の真ん中には、取り返しつかない大きな穴が開いていた。

その箱の中で、植物はまだ息づいていた。

だが、前までのような生命力は、最早望むべくもなかった。

見ると、葉が少しだけ黒ずんできた。それに、茎にも力がない。きつと、土の下に隠れている根も、恐らくは矮小化しているのだろう。その植物は、まるで己の死期を悟った猫のように、地面にうつ伏せていた。あの生命力に溢れた葉を茂らせ、その葉の重みに耐えられないのかその頭を垂れていた植物とは思えないほどに、植物としての崩壊が進んでいた。

「確かに、もう、手遅れかもな」

実は、何がしかの手を打とうと考えていたモローだったが、眼の前の植物の状況を間近に見てしまい、その決意を折られてしまった。もう、どんな手を打ったところで、もはやその植物が息を吹き返すことなど、ないのだろう。植物というのは、不可逆な存在なのだ。弱ってしまったところに、どんなに水をやっただとしても、どんなに肥料を与えてやっても、植物は生き返らない。

助けてください、という風に、頭をうなだれて助けを求める植物。けれど、モローは言った。

「すまない。助けることは、最早出来ない」

分かっています、という風に、頭をうなだれる植物。

「分かっているのに、どうしてお前は助けを求める？」

それが、息づくものとしての私の願いですから、という風に、頭をうなだれる植物。

息づくものの願い、か。

モローは、死にかけの植物の姿を眺め、ため息をついた。

外界と接触を絶つ事でしか己を保つ事が出来なかった“息づくもの”よ。四方をガラスに覆われ、冷たい風も受けず、熱だけを外から受け取るだけの“息づくもの”よ。ガラスの中でしか生きられないお前が、どうしてガラスが割れた後でさえ、生を諦めようとしな  
いのだ？

そのモローの内なる問いに、何もその植物は答えてくれなかった。

その次の日、モローの元に珍客があった。

「モローさん、こちらにいらつしやると聞いたもので、お尋ねしました。いらつしやいますか？」

部屋で、植物の押し型の整理作業を行なっていたモローを訪ねてきたのは、若い男だった。真っ白い立襟にズボン姿。そして、胸には小さな勲章をつけている。その姿に、きつと海軍の若い下士官だろう、とモローは適当に当たりをつけた。

「ん、私がモローだ」

モローは、作業の手を止めずに、名乗るように促した。すると、その男は己の所属と名前を言った。だが、モローの記憶に残ったのは、“やはり自分の見立て通りだった”という感想でしかなかった。その男は、挨拶もそこそこに本題を切り出した。

「実は、あまりに暇なので、仲間と一緒に鳥を撃っていたんですが……」

「ほう。それは結構なことじゃないか」

そう、短く相槌を打ちながら、押し型の束をまとめて横に置くモロー。その目は、下士官の方には向いていなかった。そのつれなさに少々その下士官は機嫌を悪くしたらしく、顔をしかめて続ける。

「で、モローさんが、鳥の標本を集めているという話を聞いたもので、今日の狩りの成果を持ってきたんですが……不要でしたか？」

下士官は、右手をモローの前に出した。その右手には、ぐったり

としている黒い鳥があった。首をつかまれているというのにまるで反応がないようで、まるで絞首台で釣られた男のように、舌をユーモラスに出している。

ようやく、モローは顔を上げた。

「見たことない鳥だな」

遅はせながら興味を持ち始めた様子のモローに、ようやく下士官は気を取り直したようで、少々饒舌に続ける。

「この鳥、水面すれすれのところを飛んでいたんです。それを、ズドンと撃ち落したんですよ。で、回収してきた次第なんです」

見ると、所々に赤い斑点のような傷が浮かんでいた。きつと、ショットガンで撃ち落したものだろう。そして、その鳥の足には、水かきがあつた。

「なるほど、水鳥だな」

「新種ですか？」

目を輝かせて訊く下士官に、モローは答えた。

「ああ、少なくとも、アメリカにはいない種だ」

「おお！」

下士官は嘆息の声を上げた。

「この鳥、貰っていいのか？」

モローが訊くと、下士官は答えた。

「はい、別に、僕が持っていたところで何の自慢にもなりませんし。ならば、学問の発展に寄与するほうがはるかに幸せなことです。この鳥だって」下士官は右手の鳥を掲げた。「きつと喜んでくれるでしょう」

そうして、モローの前にその鳥の屍骸を置くと、その下士官は部屋を辞してしまった。部屋には、モローと屍骸と、沈黙が取り残された。

モローは、ため息を吐いた。

「一応貰ってしまったが……」

あまり断るのが得意ではない自分の性向に、少々辟易するモロー。

屍骸の目が、モローのことを見つめている。

実は、今モローの眼の前にある鳥は、新種の鳥ではなかった。

この鳥は、世界中に生息しているペリカンに近縁の鳥で、清国の言葉で「鵜」という鳥だ。アフリカなどにも生息していることからかなり昔から知られた鳥であるが、一方で研究者や物知りの類でなければ知ることのない鳥ではある。ただ、もちろんこの鳥が「鵜」だとしても、西洋で知られた「鵜」とは多少その種が違うかもしれない。そういう意味では、集めておくに越した事はないのだが。

モローは整理していた紙束を置いて、立ち上がった。そして、「鵜」の首を持って部屋を出ると、剥製室へ向かった。

その日も、剥製室の一带は暗かった。元々、モノを保存しておくところというのは、暗いものなのだ。酒の保管室や食料の保存室のような“いかにも”な部屋から、押し型の保存室や農機具の保存室など、各種保管室が続く一帯の一番奥に、剥製の保管室があるのだ。その一番奥の扉を、モローは叩いた。

ノックしても、返事がない。

ようやく、モローはその扉を開いて中に入った。足を踏み入れてから、真っ暗だったことに気づき、モローはランプに灯を灯す。そして、ランプに灯が灯ると、部屋の輪郭がようやく浮かび始めてきた。無数の鳥達が、モローと“新入り”の鳥を迎えた。

けれど、その部屋は前までと比して、少し変化があった。

紙と木炭類が、きちんと整理されて、机の上に置かれていたのだ。きつとこれは、モローの後任に、剥製の管理についてのハイネの私物だろう。きつと、ここで絵を描いているのだ。

「全く、困ったやつだな」

別に、剥製の管理を任されたからといって、この部屋を自由に使用わけても困るのだが……と、モローは心の中で少し愚痴をこぼしつつ、この部屋の奥にある剥製の制作室に入ろうとした。

その瞬間、モローの体に何かがひっかかったのか、机の上にあった紙束が床に散らばってしまった。ばさばさ、とまるで鳥が羽ばた

くよつな音が響き、一瞬部屋に佇む鳥たちが羽ばたいたような錯覚に陥った。

「やれやれ……」

制作室の中に右手に持っていた鳥を運び入れた後、モローは床に転がってしまった紙の数々を拾い上げていった。

その紙の上に描かれていたのは、デッサンだった。

直線的で、幾何学的な絵だった。どの絵も、ハイネらしい絵だった。ハイネ、と署名されてはいるものの、けれどその署名よりも、むしろその画風の方が作者を表しているように思えた。

色々な絵が描かれていた。波間に消える鳥達。琉球の村の様子。

鳥の近影。船の食堂の様子。高官らしき人の肖像。それらが、きわめて直線的に描かれていた。アート性はあまり感じられないものの、やはり報告書や論文の類に載せたい画風だ。

一枚一枚、手に取りながらモローは唸る。そして、一枚一枚机の上に乗せていった。そして、その作業を繰り返すうち、ようやく最後の一枚になってしまった。

「おや、もう最後か」

呟いて、落ちている紙を手に取り、視線を落とすモローは、その紙に描かれている絵が異様なものであることに気づいた。

その絵は、肖像だった。

労働者風の服をまとい、こちらを向いている男の絵だった。だが、肖像において一番肝心なはずの目鼻の造形が、まるで書き込まれていなかった。そこには、まるでぽっかりと空いた穴のように、黒く塗りつぶされた丸があるばかりだった。そして、その肖像には大きくバツが描かれていた。

けれど、モローが異様を感じたのは、そんな瑣末な問題からではなかった。

その男を描き出す描線が、あのハイネのものとは似ても似つかないのだ。モローの手の中にある絵は、描線が乱れ切っていた。まるで、ナイフでめった刺しにしたような描線だった。定規で引いたよ

うな、と形容するに足る、普段のハイネの筆を見慣れているモローとしては、手の中にある描線が乱れきった絵が、ハイネの手によるものとはとても思えなかった。

「なんだ、この絵は」

けれど、その絵の裏に隠れた事実を詮索するわけにも行かず、モローはその絵を紙束に加え、剥製製作室に向かった。

そして、その日一日、モローは剥製つくりに没頭した。

モローの部屋。

例の植物は、どんどん崩壊という終わりに向かっていた。

それから一週間ほど、モローはこまごまとした雑務に追われた。

ある者が海草を拾ってきたといえればそれを乾かして押し型にし、またある者が魚を捕ってきたといえればその魚の特徴を文章で残し（モローは絵が下手なのだ）、またある者が貝殻を拾ったといえれば、その貝殻を分類した。そういうこまごまとした作業というのは、こまごまとしているゆえに時間を取られるもので、されどイライラだけは募るといふ果てしなくつまらない作業なのである。

そのつまらない作業がようやく終わりを告げたのは、海岸に逗留してから8日目のことだった。

「まったく、日本っていうのは寒い国だな、オイ」

ブラウンは、飽きもせずには海岸を見遣る。海岸線には、重そうな兜をかぶった兵士たちが、柵を背に待機している。もし、何がしかの事態があれば、すぐ打って出るぞ、とでも言わんばかりの様子であった。

「そりゃそうだ。ここは温帯気候だ。春夏秋冬のメリハリが激しいんだ。それに」モローは言った。「冬の最中、甲板なんか居るのが悪い」

甲板の隅に立って日本の海岸線を眺めながら、モローは笑った。ブラウンは、大きな体を震わせながら、手すりに上体を預ける。

「暇なんだから、しょうがねえだろ」

「なんだ、暇なのか、ブラウン」

心外そうに声を上げたモローに、ブラウンは言い訳をする。

「だってよお、俺は写真技師だぜ？ 写真、っていうのは、公式の場面でしか働かないもんさ。ライムライトっていうのは、本番の舞台でしか輝かないもんだろ？」

「ライムライトとは良かったな」と、呆れ顔でモローは続ける。「ガラにもないが」

「わかつてらい」

苦笑いを浮かべるブラウン。

ペリー率いる艦隊は、この時点では足踏み状態だった。

“ 当時の政権担当者に「一年後にまた来る」と宣告し、琉球に戻った”という、第一次日本来航の後、宣告通り“また来た”ペリー艦隊なのであるが、実はペリー艦隊は一つ大きな情報を反故にしたのである。それは、“一年後”という箇所である。ペリー艦隊は、約半年後に日本に訪れたのである。

モローら組織の下部の人間は知る由もないが、その半年早いペリー来航には、実は当時の情勢が色濃く絡んでいたのである。

第一次来航の際、ペリーを迎えた日本の政権担当者は、徳川幕府第十二代将軍・徳川家慶であった。だが、生来病弱だったその将軍は、ペリーの第一次来航から一ヶ月ほどで病死してしまったのである。

その情報を手に入れたペリーは、これを好機と見た。どうやら、日本という国の権力は世襲によって継承されるようだ、という情報も併せて手に入れていたペリーは、恐らく政権担当者の死とともに、かの政府に権力闘争の嵐が吹き荒れているだろう、と読んだ。そして、その混乱に乗じようとしたのである。

そうして、機先を制して日本に来たはいいのだが、揺さぶりが聞かなかつたのか、それとも揺さぶりが強すぎたのか、結局上陸の交渉が難航し、こうして何日も逗留する羽目になつていたのである。気の回しすぎが、むしろ裏目に出たとも言える。

何度も言うが、これら上辺の動きを、モローたちは一切知らない。なので、モローたちから見れば、「ウチの提督殿は、“一年後にまた来る”とか約束しておいて半年で切り上げるからこんなことになるんだよ、あのアル中め」となつてしまふのだが。

「ところで、ウィリアムズはどうした？」

今思い出したかのように、モローはブラウンに訊いた。頭を掻きながら、ブラウンは答えた。

「ああ、仕事だよ」

「仕事？」

素っ頓狂なモローの問いに、ブラウンは笑つた。

「ウィリアムズの旦那の仕事、つつつたら、通訳の仕事に決まつてるだろ」

「なるほど」

モローは、ふと海岸線を眺めた。兵士が構えている柵の前に、仮設の小屋が見えた。その入り口には、赤い絨毯が敷かれている。きつと、あそこでウィリアムズは、ペリーの言葉と日本側の役人の言葉の橋渡しをしているのだろう。そう思うと、なんだか滑稽だった。けれど、甲板で暇を持て余しているモローたちよりはるかに有意義なことに違いはなかった。

「そういえば」

視線をブラウンの顔に戻したモローは、次なる疑問を發した。

「ハイネはどうしたんだ？」

その言葉に、ブラウンは急に顔を曇らせた。そして、モローの顔

を睨んだ。睨んだ、とは言っても、それは非難による表情ではなく、むしろ己の感情があふれ出るのを抑えようとしているように思えた。押し黙るブラウンに、モローは重ねて訊いた。

「どうしたんだ？ ハイネも、お前も」

「……ああ、アイツのこと、放っておいてやれねえかな」

「どういうことだ？」

モローの言葉に、ブラウンはぼつぼつと続ける。

「アイツ、ちよっと古傷に障ってるんだよ。こここのところの情勢でよ」

何かを知っているような口ぶりだったが、その口ぶりにはこれ以上は語らない、というブラウンの覚悟のようなものを、モローは感じた。

「古傷？」

「これ以上は言わないよ」

大きな体を縮ませながら、ブラウンはぼそぼそと言った。本当に、これ以上語ってくれそうな風がなかった。普段は饒舌なブラウンが、である。

そのブラウンのただならぬ様子にも、モローは妙な不安を覚えた。

「ならば、本人に聞く」

モローは言い放った。すると、意外にも、ブラウンはこんなことを言った。

「まあ、モローの旦那なら、そう言うと思ったけどよ」

その、歯に何かが挟まったような物言いを聞いただと、ブラウンはまるでモローの態度を非難するように言葉を続けた。

「旦那は、やっぱり学者さんなんだな。“知りたい”っていう動機のままに動くこうとする。けどよ、世の中には、“知られたくない”ってことだって、あるんじゃないのか？ 閉じたままの方が良い、ってことだってあるんじゃないのかい？」

そのブラウンの言葉を振り払うように、モローは言い放った。

「様子を見に行く」

モローは踵を返した。

それは、別に何の理由もなかった。ただ、ハイネのことが心配だから、という、きわめていい加減な動機からでしかなかった。けれど、モローの心中には、“知りたい”という動機も確かにあって、その動機がモローの後押しをしているようだった。やはり、俺はブラウンの言う通り、“学者さん”なんだな、とモローは一人苦笑する。

狭い船の中を、歩き続けるモロー。けれど、ハイネの姿はどこにも見えなかった。甲板の上には既に姿はなかった。それに、ハイネの部屋にも、その姿は無かった。

どこにいるのだろうか？ ヤツは。そう考えて、まだ顔を出していないところがあることを思い出したモローは、その心当たりに足を向けた。

モローが足を向けたのは、剥製の保管室だった。

この部屋は、以前モローが剥製の管理をしていたころにはほとんどモローの私室同然に使っていたのだが、その仕事をハイネに譲ってからというもの、まるで足を向けなくなっていた。だが、なぜかここにハイネがいる予感がして、足を向けたのだ。

部屋の中には、果たしてハイネがいた。

おびただしい数の鳥たちに囲まれたハイネは、一心不乱に何かを描いていた。手に紙と木炭を持って、一心不乱に何かを描いていた。けれどそれは、鳥や動物の絵ではなさそうだった。ハイネの背中越しに、その絵を眺めたモローは、思わず絶句した。

ハイネの描き出す描線は、虐殺を描き出していた。

倒れるノーカラーの人々。その人々の頭を踏みじじる兵士。逃げまとう市民。その人々を追い立てる炎。流れる血に、それを吸いとる石を葺かれた街道。世界中で繰り広げられてきた光景。そして、これからも世界中で繰り広げられるだろう光景だった。

けれど、この絵がハイネの筆によるものだと、とても思えなかった。

眼の前で、ハイネは木炭を躍らせている。にも関わらず、その描線で描かれる図が、あの精緻なハイネのものとは思えないほどに乱れている。普段のハイネの絵にあるような、“見たままをそのまま描く”というポリシーとは対極にある、“物体の本質だけを書きつける”かのような、よく言えばアーティストイックな絵だった。

「……ハイネ」

モローは、背中越しに声をかけた。その声に、一瞬ハイネは背中を縮ませた。それはまるで、何かに怯える子供のようにだった。

「どうしたのだ」

モローが此処まで訊いて、ようやくハイネは振り返った。

けれど、目の焦点が定まっていなかった。

歯をかちかちと鳴らしながら、微笑んでいるのか怯えているのか分からない、妙な顔を浮かべた。見ると、額に妙な汗をかいている口も、だらしなく開いている。それが、見ようによつては微笑んでいるように見えたのだ。けれど、その目から、怯えのようなものが見て取れた。

「ははは、駄目ですね」

ハイネは乾いた声で嗤った。妙な高音が、部屋に響く。

「何が、駄目だ？」

控えめに言葉を発するモローに、ハイネはポツリポツリと単語を返す。

「まだ、忘れられないなんて、馬鹿げてる」

「忘れられない？」

モローは訊いた。

彼は、とにかく絵を描き続けていた。まるで、何かにせきたてられるようにして、虐殺のデッサンの描線を増やしてゆく。増やすたびに、どんどんその絵に迫真が迫ってくる。震える手で描いているのか、時折線が乱れる。けれど、それがむしろこの絵の主題を浮かび上がらせているようにも感じられた。

モローは訊く。

「その絵は、何だ？」

すると、ハイネは答えた。

「僕の、故郷です」

「故郷？」

モローが話を先に促すと、ハイネは続けた。

「……僕は元々、ドイツのザクセン王国出身なんです。ザクセンというのは、エルベ川が流れる、きれいなところで、全体的に、田舎な所です。ドレスデンみたいな垢抜けたところもありますが、僕はどうにも好きになれません。やっぱり、地平線の果てまで続くような穀倉風景、それが僕にとってのザクセンなんです」

まるで、昔を懐かしむような口調で続けるハイネ。

ハイネはさらに続ける。

「本当に、いいところです。もし、革命なんか無ければ、僕はずっとザクセンで、舞台の書割を書くような仕事をしていたんでしょう。田園風景に抱かれながら」

まるで、果たせなかった夢を語るように、淡々と言葉を綴るハイネ。

「革命？」

「はい」と、ハイネは頷いた。「ザクセンには、王様がいます。その王様は、国民のことをよく考えてくださる方でした。自分から、国民の権利を定めた憲法を発布するような方でした。ほとんどのザクセン人は、その王様の仁政に喝采を贈ったものです。が」

ため息をつくハイネ。けれど、彼は言葉を止めない。

「ごく一部に、こんなことを言い出す者がいたんです。“そもそも、王などというものは不要ではないか！ アメリカを見よ！ かの国には、王などいないではないか”と。その言葉に、耳を傾けてしまふものも多かったんです。……僕のように」

「なんだと？」モローは頓狂な声を上げた、「つまり、君は革命に身を投じたのか？」

意外だった。ハイネという男に、そういう過去があったとは。虫も殺せないようなこんな青年が、革命などに身を投じるなどあるものか、とモローはいぶかしんだ。

ハイネは頷いて、続けた。

「とは言つても、僕の仕事は前線で体を張るような仕事ではありませんでした。僕がやっていたのは、蜂起を促すビラの製造や、檄文の作成でした。元々、絵を描くのが本業だったので、それは当たり前だったのかもしれませんが」

絵を描き続けるハイネ。ハイネの視線は、その絵には落ちていなかった。何故なら、ハイネはモローの顔をずっと見つめていたのだから。けれど、彼の指先は、虐殺の絵をさらに精巧なものにしてゆく。まるで、手先がその絵の配置を全て覚えているかのようにだった。彼は続ける。

「そうして、革命が起こされたんです。確か、7年前だったと思います。ようやく僕は20歳になっていました。僕のような貧乏な絵描きが国を変えるんだ、と気炎を吐いたものです。きっと、それは革命の同志たちもそうだったのだと思います。革命に身を投じるのは、常に社会に疑問を感じている若い連中なんですよ、きっと」

ハイネは、笑った。けれど、その笑顔は無理をしてひねりだしているもののように思えた。その笑顔のまま、ハイネは続ける。

「でも、革命は失敗したんです」

少し、ハイネは肩を落とす。だが、その仕草は落胆のためのものではないようだった。むしろ、肩にこびりついた思い出を、よいしよと下ろすような仕草だった。

「そりゃ、そうなんですよ。だって、ザクセンの王様はそもそもが開明的な人でした。別に、圧制を敷いているような王様ではなかったんですし、国民から慕われた王様だったんですよ。でも、僕たちが革命を起こしてしまった。……大衆から支持を得ない革命なんて成功するはずがなかったんです」

「ではなぜ、革命など」

そう訊きかけて、モローは押し黙ってしまった。ハイネが、もの凄いい形相でこちらを向いているからだ。その形相のまま視線を床に落としたハイネはさらに続ける。

「きつと、理由なんて無かったんです。きつと、僕たちは熱病に浮かされていたんでしょう。言うなれば、時代の空気、そういうものに当てられてしまったんでしょう」

ため息をつき、さっきまでの感情的な口調を改め、さらにハイネは続ける。

「けれど、革命が失敗して後も、僕たち革命派は活動し続けました。革命派にとつてありがたかったことに、この革命を受けて、王様が専制化を進めたことでした。僕らは、ある程度の勢いを得ました。

“見たことが！ ようやく馬脚を現したぞ”と囁し立てました。そして、その檄が国中に広がった頃を見計らって、僕らは蜂起したんです」

蜂起。即ち、それは王政への反乱。

アメリカ産まれのアメリカ育ちで、そもそも「王」という概念を肌で理解していないモローにとつて、ハイネの語るそれらの言葉は、まるで中世の騎士道物語のように、遠い物語のように思えた。けれどその光景は、モローよりも若い、少年のような絵描きの両肩に押し掛かった運命だった。

「でも、それも失敗しちゃいました」と、ハイネは言った。「蜂起

が起こるや、王様は鎮圧軍を編成しました。そして、それら精兵を僕ら革命軍にけしかけたんです。僕らはあくまで只の市民でしたし、向こうは紛れもない兵隊でした。結局、その二者の闘いは、一方的なものだったのです」

そして。ハイネはさつきまで描いていた絵を、モローに示した。

「結果は只の虐殺でした。僕らの仲間は皆、まるで雑草を踏みにするかのように蹂躪されてしまいました。……そのせいか、血を見ると、あの虐殺が頭に浮かぶようになってしまった。はは、駄目ですね、僕は」

「そうか、それで君は、アメリカに移住したわけか」

「はい」ハイネは頷く。「ザクセンにいたら、殺されてしまいます。だから、僕はアメリカに移り住んだんです。我が身を守るために」しばし、すわりの悪い沈黙が二人の間に滑り込んだ。

が、その沈黙を、モローが壊した。

「なあ、訊いていいか」

「なんです？」

モローは訊いた。

「なぜ、この使節団に参加したのだ？」

ペリー艦隊というのは、表向きは“使節団”だった。だが、事あらば一戦を交える覚悟のあった艦隊である。戦争に嫌気が差したというのなら、そもそもそんなところに近づく必要など無かったのである。

すると、ハイネはかぶりを振った。

「僕がこの使節団に参加したのは、“革命”を日本に伝えるためでした。……この使節団のお話を頂いたとき、“日本という所には”シヨーゲン“という王がいる”という話を聞いて、この話に乗ったんです。きつと僕は、故郷で成せなかったことを、新天地で成そうとしたんです」

話の続きがありそうだと踏んだモローは、話をさらに促した。

予想通り、ハイネは続ける。

「けれど、気づいてしまったんですよ。僕はもう、革命を伝えようなんて気がないことに。あんなに人が死んで、あんなに土地が荒廃して、あんなに人の心が荒むことを、他の国に伝えるなんてこと、僕には出来ないな、ってことに、最近、ようやく気づいたんです」

「もう一つ、聞いていいか」

「なんです？ と話を先に促すハイネ。モローは慎重に言葉を選びつつ続ける。

「この前、たまたまこの部屋で見てしまったんだがね。顔を真っ黒に塗りつぶされた、肖像のようなデッサンがあっただが、あれは、君が描いたものだろう？」

「はい」

思い当たるものがあるのか、ハイネは頷いた。

「あれは、誰なんだ？」

「あれですか。あれは……。僕の、死んだ友人です。いえ、友人というよりは、戦友。戦友というよりは、同志と呼んだほうがいい人です。あの人は、最初から革命運動に参加していた人で、革命運動のリーダーみたいな人でした。あの人の言葉は、本当に綺麗でした。“王政を打倒せよ”とか、“圧制を許すな”とか、“我々の手に自由を”みたいな野暮な言葉さえ、彼の手にかければまるで特別な言葉のように響いたものです。……けれど、彼もまた、蜂起の際に、兵士に殺されてしまいました」

「ハハハ、とハイネは笑う。」

「でも、不思議なものですよね。あれだけ、長い間過ごした人のはずなのに、まるで顔が思い出せないんです。だから、顔を真っ黒く塗りつぶすしか描きようが無かったんです」

ハイネの言葉に掛けるべき言葉が見つからないまま、モローは立ち尽くすしかなかった。そして、諦めたようにかぶりを振ると、剥製保存室をあとにした。

結局、そんな日々が続くうち、遂に一ヶ月が経ってしまった。

その間に、ハインはほとんどその憔悴の度を深め、部屋にこもる事が多くなってしまった。ブラウンは、そんなハインのことをおろおろと心配した。ウィリアムズはしばらくモローたちの前に姿を現さなかった。そして、モローの部屋の片隅にある、もはや本来の目的を忘れてしまったウオードの箱の中には、例の植物の屍骸が伏していた。もう、押し型にする気にもならなかった。

そんな単調な日々の中、ちょっとした変化が訪れようとしていた。「やあ、モロー君」

船の甲板を歩いていたモローを、ウィリアムズが呼び止めた。そのときのウィリアムズは、普段着ているような航海用のフロックコートではなく、あくまで儀礼用に仕立てられているであろうフロックコートをとっていた。ぱつと見て、海軍の高官のようであった。しかも、彼の後ろには、同じく儀礼用のフロックコートをまとった高官たちが控えていることもあって、まるでこの使節団の提督のような威容さえ滲ませていた。

「ああ、ウィリアムズ。久し振りだな」

そうモローが答えると、ウィリアムズはやはり愚痴り始めた。

「ああ、同じ船で生活しているのにも関わらず“久し振り”とはどういうことだろうな？　きっと、提督殿が我々通訳を酷使しているからに違いない。まったく、あのアルコール中毒者は……」

モローの冷たい視線に気づいたのか、ウィリアムズはコホンと咳払いをした。そして、後ろに控える高官たちに、“先に行け”と顎で促す。その命令に従い、フロックコートの一団はウィリアムズとモローの脇をすり抜け、向こうに行ってしまった。

「ああ、あれは、私の部下たちだ」と、ウィリアムズ。「皆、優秀でな。どこかの提督殿の言い間違いを、すべて正しい言葉に変換する。きっと、この使節団において、一番人材に恵まれているのは、きつと通訳の部署だな」

「で？」

「

モローはウィリアムズの顔を睨んだ。

「で？ とは何だ？」

あくまでとぼけるウィリアムズに、モローは言った。

「どうして、己の部下達を先に行かせたんだ？ 普段のあなただったら、挨拶してから素通りだろう？ なのに、こうして私の前に立っている。まるで、人払いをしたかのように振舞った後で、な」

「何が言いたいのかな？ モロー君」

ニヤニヤと笑うウィリアムズに、モローは笑顔を返す。

「何か、私に言いたいことがあるのだろうか？　しかも、内密な内容と見た」

その言葉に、ウィリアムズは突然、ガハハハ、と豪快に笑った。だが、それはモローの言ったことが的外れだったから、という理由からではなさそうだった。

「当たり前だ、当たり前」面白そうに、ウィリアムズは言った。「いやあ、君に、植物学者なんて肩書きはもつたいないなあ。それほどの洞察力があれば、軍人をやるうが政治家をやるうが、あるいは通訳をやるうが成功するぞ。特に通訳などは成功するな。分からない単語に出会ったとき、いかに文意に沿った訳語を当てるかが、通訳という仕事の要諦なのだから」

芝居かかったウィリアムズの口調に、モローはため息をついた。

「能書きはいい。本題に入ってくれ」

「本題に入る前に」ウィリアムズは、指を一本立てた。「一つ、訊きたいことがある」

「なんですか、と訊くと、ウィリアムズは答えた。

「君は、日本の土を踏んでみたいかね」

その質問に、即座にモローは答えた。

「踏みたいね」

この答えは、モローの任務からすれば当然の話である。

モローの任務は、「未知の動植物の収集」である。もちろん、海の上や中にも、新種の動植物は存在するのだが、それ以上に、やはり陸地の方にも、新種の動植物がいるのは間違いない。モローのような人間からしたら、これまで国を閉ざっていて外界と接触の無かった国というのは、何よりも魅惑的なところに違いないのだ。

けれど、艦隊の乗員たちは、まだ上陸許可が下りていない。訊く

ところによると、向こうの政権との会談で、今ひとつ芳しい返事をもらえないらしい。

なので、モローは、宝の山を目の前にしつつ、指をくわえて眺めているような日々を過ごしていたのだ。

「と、いうことは」モローは目を輝かせた。「もしや、もうそろそろ、上陸許可が下りるのか!?」

その言葉に、ウィリアムズは首を横に振った。

「いいや。それはない。まだまだ、先方はこちらの上陸を渋っている。きつと、もろ手を振って日本の土を踏めるようになるのは、もう少し先の事だろう」

「なんだ」

さっきまで輝かせていた瞳を暗くして肩を落とすモローに、ウィリアムズは微笑みかけた。

「だが、何事にも裏道はあるものだよ、モロー君」

ウィリアムズは、指を一本立て、それをまるで指揮棒のように振った。それを、まるで話の先を捉えるかのように目で追うモロー。けれど、指は同じところを行ったり来たりするばかりで、話の落ち着くところを示してくれるほど親切ではなさそうだった。

ついにこらえきれなくなつて、モローは訊いた。

「なんだ、その“裏道”というのは？」

すると、ウィリアムズは答えた。

「実はな……」

ウィリアムズの言うことはこうだ。まだ、艦隊の乗員全員に上陸許可が下りるほど、会談は進んでいない。せいぜい、こちらと先方との、資材等の些細なやりとりを規定する段階でしかない。これから、上陸許可やら、和親条約やらの調印を目指すことになるだろう。だが、ここで裏道となりうるのが、“資材等の些細なやりとり”というヤツだ……。

「話の先が、読めないが」

「つまりは、だ」ウィリアムズは続ける。「その、“資材等の些細

なやりとり”の際に、こちらの乗員のごく一部が、日本の土を踏んでいる、ということだ」

「な、なるほど！」モローが手を叩いた。「その、“乗員のごく一部”とやらに紛れて、日本に侵入すればいいわけか！」

「ばばば、馬鹿、声が大きいわ！」モローの口を慌てて塞ぎ、ウィリアムズは辺りを見渡した。「よかった、どうやら、訊いている者はいなかったらしいな」

つられて、甲板を見渡すモロー。けれど、その上には、寒々しい空気以外、何者の影も無かった。

声のトーンを落として、モローは訊く。

「で、どういう風に紛れればいい？」

「簡単な話だ」ウィリアムズは言った。「私の権限で、君を一時的に通訳見習いにする。そうして、君を“資材等のやりとり”の通訳官として使う」

「ちょ、ちょっと待て」モローは手を振って話に割り込んだ。「言っておくが、私は英語以外の言葉を喋れないぞ？」

「そんなもの、折込済みだ」と、ウィリアムズ。「当然、横には私が控えている。君はその際、さも当然のことのように、私の言葉に頷いていけば良い」

悪いことではないな、とモローは頷いた。

と……。

「おい！ その話、本当か！？」

突然、二人に大声が浴びせられた。話している内容が内容だけに、二人とも肩をびくっと持ち上げた。そして、ゆっくりと振り返った。

そこには、例の大男が立っていた。

「ああ、ブラウン」

ウィリアムズの言葉に、ようやくこの場に安堵の雰囲気为零れ落ちた。

ブラウンは顔をほころばせて続けた。

「そんな面白い話、どうして俺にも話してくれないんだよ！」

大声で、そのたまうブラウン。きつと、そういう風に秘密を秘密にしておくことが出来ないようなヤツだから、話が通らないのだ、ということにブラウンはまったく気づいていない。

「でも、全部訊いたぞ」

此処は視界が開けた甲板の上である。さっきまで誰もいなかったはずなのに、いったい何処でこれらの会話を聞いていたのだろう。きつと、恐るべき地獄耳に違いない。

ウィリアムズはかぶりを振りながら、ため息をついた。

「でもまあ、訊いてしまった以上は仕方ないな」

結局、そんな形で、ブラウンもその計画に乗ることになってしまった。けれど、モローは首を傾げるばかりだった。あのブラウンを、通訳に化けさせるなんて、出来るんだろうか、と。

そのブラウンの懸念は、現実のものになった。

ウィリアムズの私室で、通訳の正装であるフロックコートの衣装合わせを試みたのである。もちろんそれは、モローたちを通訳に化けさせるためである。

モローの場合は、上手く行った。そもそもがウィリアムズとほとんど頭身が変わらず、しかも元々の知性的な顔が手伝って、見事に通訳に化けている。

だが、ブラウンの場合はそうはいかなかった。元々肩幅が大きく、頭一つ飛びぬけて大きいブラウンの場合、ウィリアムズのフロックコートでは足が大きくはみ出てしまう。しかも、無精ひげの黒い顔が、まるで知性を感じさせない。それが、一番の問題なのだ。フロックコートというのは当時の海軍の正装だから、体が大きい人向け、フロックコートというのも存在するのである。だが、一番の問題は、ブラウンという男に、フロックコートがまるでしっくりこない、という点なのである。

「むむむ、どうしたものか」

「やっぱりなあ」

顔を見合わせてため息をつきあうウィリアムズとモローの様子に見かねて、ブラウンは叫んだ。

「何が、“どうしたのか”なんだよ！ 何が“やっぱり”なんだよお！」

明らかに寸の合わないフロックコートを羽織るブラウンは、やはりちぐはぐな印象だった。

「ま、ブラウンの件はあとで考えることにして」

「ま、そうだな」

顔を見合わせて目配せしあうウィリアムズとモロー。その様子に、ブラウンは珍しく金きり声を上げた。

「だ・か・ら！ “ブラウンの件”ってどういうことだよお！！」  
知らぬは常に、本人ばかり。

「楽しそうなことになってきた」

自分の部屋に戻ってから、モローは思わず呟く。

日本の土を初めて踏む、アメリカ人植物学者。やはり、初めてというのは気分がいいものだ。それ以上に、誰もが知らない植物を見ることが出来る喜び。世界中で、自分しか知らないもの。それらを、一度に目に焼き付けることが出来る。

その事実が、モローを急き立てる。

ベッドに腰をかけて、ふと、部屋の端を眺めた。

そこには、あの正体不明の植物が、どんどん朽ちつつあった。葉も茎も、黒く変色し、もはや修復不能なところにまで達しつつあった。きつと、あと一月も放って置けば、この世界の法則に従い、きつとあの植物の痕跡は全て消滅してしまうのだろう。

そう思うと、やけに清々しい気分を襲われた。

今夜は、寝付きが良さそうだ。

モローはベッドに崩れ落ちた。そして、そのまま眠りの世界に落ちていった。

それから数日して、例の計画が決行されることとなった。

だが、その計画に、幾分か変更があった。

一つは、モローの扱いである。

それは、その日に日本側に搬出する“資材”とも関係があった。その日、日本側に搬出する“資材”というのが、アメリカ産のじゃがいもの種芋と、アメリカ製の農機具だったのである。

「なんでまあ、そんなものを贈り物になんかするのかねえ？」とはブラウンの弁だが、ウィリアムズ曰く、「かの国の農業はまったく効率化・工業化されていないためだ」とのことだった。とにかく、じゃがいもと農機具の管理をしていたモローにとって、この件は朗報だった。

何せ、通訳のフリをする必要が無くなったのである。

そして、第二はブラウンの扱いである。

あまりに通訳に見えないブラウンの扱いについて、若干のごたごたがあつたのは周知の通りだが、結局、「資材を運ぶ作業員に化ければいいんじゃないか？」という、至極もつともな意見で一致を見た。ために作業服を着せてみても、まるで違和感がない。筋肉質な腕に見上げるほどの上背は、まさに作業員なのだ。「うんうん、これなら大丈夫」「大丈夫」と、ウィリアムズとモローが顔を合わせて頷くほどであった。

そして、これが一番大事なのであるが、この計画に、もう一人が噛むことになった。

何を隠そう、ハインである。

どこから話を仕入れてきたのか、ある日ウィリアムズのところに来て、「そんな、面白いことがあるというのに、僕に話を持ってきてくれないなんて」と憤慨したそうだ。けれど、ウィリアムズとし

ては、“ハイネは大分憔悴している”という情報をモローから仕入れていた関係で、わざと伝えていなかったのだ。

ハイネは少々頬がこけていたが、けれどこう言って笑った、という。「仲間はずれにされてしまうのも気分が悪いですし、たまには外出して気を紛らわしたいですし」

とにかく、いつもの四人で、例の計画が決行されることになった。

その日は、曇り空だった。

寒い日が続いていた日々だったはずなのに、その日だけは異様に暖かい風が甲板に走っていた。しかし、陽光が厚い雲に隠されているせいで、どうにもすっきりした天気ではなかった。だが、暖かい日ということに違いは無く、作業員達は皆袖をたくし上げていた。その天気にも不満でもあるかのように、ブラウンは空を睨んだ。

「まったく、力仕事をする日に限って、こんなに暑いんだからなあ。まったく、どうということだよ」

「普段の行いが悪いんだろう」

モローは笑った。

「つつかよ、モローの旦那も、これ、運んでくれないかねえ？」

と、両手に抱える木箱を示しつつ、ブラウンはモローに言う。が、手ぶらで佇むモローは、それを難なく袖にする。

「悪いな、私はあくまでこの監督責任があるモノでな。……おお、その君、その荷物はあつちに運んでくれ！」

わざと、目に付いた作業員に、適当そうな命令を下すモロー。

「チクショー」

どしどしと音を立て、ブラウンは向こうに荷物を運びに行ってしまった。

モローはふと、足元の砂浜に目をやる。琉球の白い砂浜とは違い、灰色のような、ねずみ色のような、黒っぽい色をしている海岸だった。恐らくは、川から流されてきた、砂が堆積して出来た砂浜なのだろう。そして、その砂浜の向こうには、針葉樹林が控えていた。

その針葉樹、海風に長く当たっているせいか、どの幹も不自然に曲がっていた。

砂浜に立てられた柵の手前まで、作業員達は木箱を運んでいた。あの柵までが、とりあえず、アメリカが確保した身の置き場なのだろう。

柵の向こうでは、正装に身を包んだウィリアムズとハイネが向こうの役人と何かを喋っていた。とは言っても、会話をしているのはあくまでウィリアムズだけで、どうやらハイネはただ頷いているだけのようだった。

監督なんてものはつまらないもので、問題さえ起こらなければ何の口出しをもする必要がない。作業員たちが何の問題も起こさなくては、何の口出しをする必要も無いのだ。結局、モローは時間を持って余しつつ、ダラダラと作業を見続ける羽目になった。

そして、その作業が終盤に近づきつつあった頃、柵の向こうのウィリアムズが、モローを手招きした。それに気づいたモローは、柵の間にある細い門を抜ける。後ろには、手筈通り、ブラウンが続く。すると、その細い門を守備していた兵士二人が、突然持っていた長い棒を、モローの胸の前で十字に塞いだ。そして、モローたちに何事かをまくし立てる。

何を言われているのかも分からないので反論も出来ず、ただ突っ立っている、異変を察知したウィリアムズが飛んできてくれた。そして、異国の言葉で何事かを話してくれたおかげで、ようやくその番人は棒を納めた。

「助かった、ウィリアムズ」  
すると、ウィリアムズは後ろのブラウンに聞こえないように、小声で愚痴る。

「……どうやら、ブラウンの風体が怪しかったらしい。一応、作業員の長だ、と説明しておいた」

確かに、アメリカ人より一回り小さい日本人から見れば、アメリカ人の中でも群を抜いて大きいブラウンなど、怪しい存在に違いな

い。

モローたちは、柵の奥にあった小屋に通された。その小屋は、床が板張りされていて、それなりに居住性のある小屋らしかった。そして、その小屋の中には既に、日本側の役人が座っていた。

そこには、アメリカ式の椅子と机が置かれていた。だが、日本側の役人が座っていた椅子はアメリカ式の椅子ではなく、まるで折りたたみ式の椅子のような、粗末な椅子が並んでいて。

そこに通されたモローたちは、とりあえずアメリカ式の椅子に座った。

そして、そこから、今回運び込む資材についての説明を始めた。

モローは、自国の言葉で今回贈ったジャガイモと農機具の素晴らしさを力説した。それを、通訳・ウィリアムズが訳して日本側に伝える。だが、日本側の役人達には、ジャガイモの素晴らしさも、農機具の素晴らしさも理解できないようであった。まあ、役人なんてものは往々にして農作業に興味がない人種である。最初から期待はしていなかったが、けれど実際にこうして興味が無さそうにされてしまうと、さすがに心が萎える。最後に、日本側の役人に質問を募ってみたが、まるで反応がなかった。

そんな、お互いに噛み合わないままの協議が終わってしまった。

ウィリアムズを先頭に、ハインとブラウン、そしてモローが後ろに続く。そして、門をくぐった。

「さて、ここからが、本番だ」

ウィリアムズは、小声で呟いた。後ろに続く3人は、ちいさく頷く。

手筈通り、荷物の搬入のために待っていた、アメリカ側の作業員たちの間に入る。そして、その一団が船へと続く棧橋に向かう。その棧橋の横は岩場になっていて、日本側からはよく見えない。最初、ウィリアムズが「あの岩場から抜ければ、日本側にバレないだろう」と見通しを立てたとき、モローは思い切りいぶかしんだ。だが、さつき日本側の柵から岩場を見たときに、確かに死角があるようだった。

た。

作業員の一団は、どンドン棧橋に、つまりは件の岩場の近くに、近づいていった。そして、ウィリアムズたち一団が、その岩場に差し掛かった瞬間、4人は岩場の方へ躍り出た。何人か、作業員たちが訝しそうにしているものの、こちらの“気にするな”という視線を飛ばすと、しらばくれてくれた。むしろ、問題となるのは、今の行動が日本側に察知されたか否か、という点なのだが、大岩の向こうからちよつと身を出してみても、日本側がこの行動に気づいた様子は無かった。

「大成功、だな」

ウィリアムズの言葉に、3人はニカっという笑顔で返した。

まず4人は、岩場を海伝いに歩いた。けれど、そこには当然岩しかなく、植物も動物もほとんどいなかった。空の上に、カアカアと無く、白い鳥が飛んでいるばかりだった。比較的暖かい風に吹かれ、その鳥は喜んでいようだった。

そして、岩場を抜けた先には砂浜があった。

その砂浜には、一切の人影も無かった。それに、小屋や網を干す台などの人工物が一切無かった。

「へえ、砂浜だ」

ハインが、何の感慨も無さそうに呟いた。

「当たり前だろ、ハイン」普段よりも浮かれた声で、ブラウンは言う。「海が近いんだからな」

そんなやりとりの後、4人は砂浜の奥に控える、針葉樹林の方に向かった。

針葉樹林の中は、真っ暗だった。その木の幹を見ると、まるで象の角質のような皮がへばりついている。そして、海風に吹き晒されてしまっているからか、グニャグニャと曲がっている。日本という国では、どうやらこの植物を、海風避けに用いているらしい、とその木の幹を撫でながらモローが考えていると、ウィリアムズが突然こう言った。

「きつとこの植物は、“pinus sylvestris”と同じ種だろう。葉の形がそっくりだからな」

確かに、ふと葉の形を見ると、イギリスなどに自生するpineの一種、“pinus sylvestris”と似た性質を持っているようだった。だが、“pinus sylvestris”はとても背の高い樹木であるのに、今目の前に息づいている木は、せいぜい背丈の三倍ほどしかない。

「きつと、変種だろう」

と、怪訝な顔をしているモローの心中を察したのか、ウィリアムズは付け加えた。

【19】(後書き)

蛇足

pinus sylvestris【英】 : ヨーロッパアカ  
マツ

pine (tree)【英】 : マツ

その林を抜けた先には、村落があった。板で葺いた屋根。そして、紙と木と漆喰で作られた壁。清潔な家を見慣れているモローたちからしたら、眼の前に広がる村落は、相当に粗末なつくりの、家の集まりだった。その村落には、ほとんど畑の類が存在しなかった。網が所々干されているところを見るに、恐らくは漁村なのだろう。だが……。

モローの疑問を代弁するように、ハイネが呟いた。

「人っ子一人いませんね」

そうなのだ。さつきから様子を伺っているのだが、まるで人っ子一人見えない。

「きつと、漁に行っているのだろう」

そう、興味無さそうにウィリアムズが呟いた。

けれど、さすがに村落に入る勇気の無かった4人は、また林の中を歩いた。

そして、遂に、姿を出してもいいような地点を発見した。

そこは、道だった。

どうやら、海岸沿いに作られた道らしい。だが、通行止めにもできているのか、そもそも人の往来が少ないのかは分からないが、ともかく人っ子一人ない道だった。

「おい、ここなら大丈夫なんじゃないか？」

ブラウンの言葉に、ウィリアムズは同意した。

「ああ、問題ないだろう。だが」心配性なウィリアムズは、釘を刺すのも忘れなかった。「人の気配を感じたら、即林に逃げ込むこと！ いいな」

「おうよ」

そのブラウンの返事と同時に、4人は道に出た。

誰もいない道の前方を見遣るブラウン。辺りを見渡すハイネ。道

端に咲く雑草を眺めるウィリアムズ。その3人の様子を眺めるモロ

。「ここが日本か」ブラウンは、大きな手で目に庇を作りながら言った。「やっぱり、何ていうかな、異国情緒、って奴か？ あれがあつてなかなかいいね！」

「そうですか？」ハインが首を傾げる。「異国情緒、っていうなら、むしろ琉球のほうがより感じましたけどね」

「はっはっは」立ち上がったからハインの肩を叩き、ウィリアムズも会話に加わる。「日本は日本で異国情緒があるさ。何より、この国の変なところは、人間だな」

「人間？」

声を揃えて疑問を表明したブラウンとハインに、ウィリアムズは言う。

「この国の人間は、髪の毛の一部を剃りあげる習慣があつてな、それがまた笑えるんだな」

そう、面白そうにウィリアムズが笑った瞬間、モローはあることに気づいた。

ウィリアムズの背後、数フィートのところに人が立っているのだ。この瞬間、モローは他の3人と対面していたので、当然ウィリアムズの後ろに立っているのは顔見知りの3人ではない。しかも、ほぼ確実に、ペリー艦隊の者ではない。つまりは……、現地人だ。

黒っぽい装束を身にまとい、左腰に刀を差している。一瞬役人かとも思つたが、けれどその装束が粗末だったのでその可能性は低そうだった。右手に木で出来た剣を持つていたことも、役人である可能性を低くしているようだった。それ以上に、かの現地人は二十歳にも達さないような若者であつたことも、“役人でないのではないか”というモローの希望的観測を後押ししていた。

モローは、ちよいちよいとウィリアムズの後ろを指差した。

だが、会話に興じている様子のウィリアムズたちは、そんなモローの事に一切気づかない。もう一度、ちよいちよいとウィリアムズ

の後ろを指差した。だが、日本の髪の毛に関する習慣に笑ってばかりで、モローの指に気づく様子がない。

しょうがないので、現地人を刺激しないように小声を出すことにした。

「おい、ウィリアムズ」

そのモローの声に気づいたウィリアムズは、会話を止めてモローの顔を覗きこんだ。

「ん、何だ、モロー君」

実は、心臓バクバクものだったのだが、あえて平静を装いつつ、モローは言った。

「おい、ウィリアムズ。慌てず焦らず、かつ何があっても声を出さず、後ろを振り返ってみろ」

「は？ 何を言っているだね、君は……、あ」

言われたとおり振り返ったウィリアムズは、すぐにゆっくりと顔を戻した。顔が真っ青な上、顎をガチガチ言わせている。

「どうしたんですか？」

「変なモンでも……」

ウィリアムズの様子に疑問を感じたブラウンとハイネも後ろを振り返り、そしてすぐ前を向いた。

「おおおおおお、おい、あれ……」

「日本人、ですよね」

「どうする？」

顔を見合わせながら、そう言い合う3人に辟易したのか、ウィリアムズが言った。

「言ったらう。日本人に見つかったら、とにかく林に隠れる手筈だ」

「もう、手遅れでしょう」

ハイネはそう突っ込んだ。

もう一度、4人はその日本人の方を眺めた。

その日本人は、モローたちの方を、興味が無さそうに見ている。

悪意があるようにも見えなかったが、好意があるようにも見えなか

った。だが、それは考えようによってはいいことも言える。こちらが変な手を打たない限り、あちらも反撃してこないことを意味しているからだ。もちろん、左の刀が気になるが、どうやらこの国の特権階級は皆身分標章として刀を差す決まりになっているようだから、あまり心配するほどのものでもあるまい。

皆の顔を順番に眺めながら、モローは提案した。

「とりあえず、コミュニケーションを図るべきではないか？」

咳払いしてから、さらに続ける。

「あまり、ことを荒立てるのは良くないし、このまま逃げたらそれはそれで事になりかねない。ならば、あの現地人を取り込んでしまったほうが良いのではないか？」

その提案に、ブラウンも賛成する。

「おう、なんだか分からねえけど、でもモローの旦那の意見は、割とグツと来るんだが」

ハイネは特に意見を言わなかったが、けれど心はブラウンと同じようであった。

その様子を確認したモローは、ウィリアムズの顔を眺めた。

「と、いうわけだ、ウィリアムズ。君が、コミュニケーションを取ってくれないか」

「な、なんで私が！」

明らかに、ウィリアムズは狼狽の色を見せる。

「決まっているだろう」と、モロー。「この中で、この国の言葉を喋ることができるのは君だけだ。それに、日本人との交渉に一番慣れているのも君だろう？」

「ぐむむ……」

明らかに渋っているウィリアムズに、ブラウンがダメ押しを加える。

「いざとなったらよ、俺が助けてやるから安心しろよ」

「ぜ、絶対だぞ」

ブラウンの顔を、まるで哀願するような顔で眺めてから、ウィリ

アムズは踵を返し、例の日本人のところを歩を進めた。緊張の面持ち、かつ緊張の足取りで向かうウィリアムズとは対照的に、例の日本人にはまるでそんな気負いのようなものを感じ取れなかった。

そして、ウィリアムズは異国の言葉でその日本人に話しかけた。

その日本人も、いやに明るい声色で、そのウィリアムズという言葉に応じたようだ。やはり、あまりこちらに敵意を持っているようではなかった。

最初のうちは、まるで言葉が通じなかったらしく、お互いに言葉を聞きあうようなポーズを見せたときもあった。だが、やがて言葉を交換し合ううちにその齟齬も溶けてきたらしく、お互いに笑顔で会話するまでになっていた。そしてしばらくしてから、ようやくウィリアムズはこちらを手招きしてきたので、3人はそれに従った。

ウィリアムズが言うには、この日本人は、やはり役人ではないらしかった。この沖に停泊しているペリー艦隊を見に来た観光客のことだった。

「ほう、つまり、現地人から見れば、俺たちはサーカスみたいなもんなんだな」

ブラウンはそう茶化した。

「そういえば、この人のお名前は？」

ハイネの言葉に、ウィリアムズは答える。

「ああ、この人か？ この人は……」

そう言い掛けたところで、その紹介されるべき日本人が、突然会話を割って入った。もしかすると、その場の空気で、名前を聞かれているものと察したのか。いつぞや、「察しのいいヤツは通訳向きだ」とウィリアムズが言っていたが、もしその格言に真実性があるとするなら、きっとこの眼の前にいる現地人は世界一の通訳になれるだろうな、とモローはぼんやりと思った。

その日本人は、言った。いや、名乗った。

「Sakamoto Ryoma」

不思議な音節の区切り方だ。少なくとも、英語的な名前ではない。

当然だが。

ハイネは、その音節を、自分のものにするように呟いた。

「サ・カ・モ・ト？」

すると、その日本人は微笑んだ。

「サカモト！」

もう一度、ハイネは言った。

その日本人、サカモトは、嬉しそうに目を細めた。

「そう、この方はサカモトというらしい。どうやら、苗字のようだな」

と、御託を並べるウイリアムズだったが、そんな彼の言葉を聞くものは無かった。ブラウンもハイネも、「サカモト！ サカモト！」と連呼して、人の良さそうな現地人を困らせていた。

その様子を半ば傍観していたモローの耳元で、ウイリアムズが愚痴りだした。

「あの日本人、訛と方言が酷くてな。時折分からない単語が出てくる。困ったものだ」

「訛？ それは、北部訛と南部訛くらいの違いなのか？」

すると、ウイリアムズは唇を吊り上げながら続けた。

「いや、英語とドイツ語くらいの差はあるな」

「サカモト！ サカモト！」という連呼に、ハイネとブラウンが飽きだした頃、ウイリアムズはサカモトに話しかけた。そして、何かを問いただすようなポーズを見せて、坂本との会話に興じた。

何度か、お互いの意思を確認しあうように言葉を問い直していたが、やがて意味が通じたのだろう、坂本はにっこりと微笑んだ。そして、kocchi、という音節をウイリアムズにぶつけると、モローの横をすり抜け、歩き出した。

「な、何を言ったんだ？」

怪訝に訊くモローに、ウイリアムズは答えた。

「ああ、“ここらへんに、花が咲いてませんか”と聞いたんだ。ど

うやら、意味を取ってくれたようだ」

そう説明を加えると、彼はサカモトに続いた。異国で知り合いからはくれたらたまらないとばかりに、ハインやブラウン、モローもそれに従った。

サカモトに案内されたのは、道沿いにあつた小山だった。

その小山の入り口には赤く塗られた柱が二本立っていて、その上の方に二本横木が括りつけられている、一見すると門のようなものをくぐった。だが、門とするには、何かを防ぐ風は無かった。ただ、立っているだけの印象を受けた。

そして、その“門”の先にあつた長い石段を登り、ようやく昇りきったところに、大きな建物があつた。村落で見た家よりもはるかに大きい。それに、屋根を葺いているのは板ではないようで、所々毒々しい緑色が浮かんでいることから、きっと銅板で葺かれた屋根なのだろうと見当がついた。ここが、サカモトの宿舎なのだろうか。だが、サカモトはそんな建物のことなど意に介さないかのように、建物の脇を進んだ。

「なんでしようね、この建物は」

ハインが、控えめにウィリアムズに聞く。

「さあな、知らん」

見ると、その建物の玄関と思しきところに、紅白の紐が吊るされていて、その紐の真下には大きな箱が置かれていた。紐が吊るされている先には、大きな鈴がついていた。

「面妖な」

ウィリアムズは、顔をしかめた。

そんなこんなと内輪で話しているうち、やがて、ずんずん進んでいたサカモトの足が止まった。きつと、ここがゴールなのだろう。

そして、両手を広げ、指で先を示した。その先には。

桃色の花を咲かせる、一本の木が佇んでいた。

まだ、植樹されて日が浅いのか、まだ根元の土が新しかった。そ

れに、幹もまだまだ細いし、背もようやくブラウンを越した、といった程度の高さでしかない。

「これは……？」

「どうやら、ウィリアムズもこの花について何も知らないらしい。

実は、モローにもその花を同定することは出来なかった。ただ、花の形状から、バラ科の植物だということを察することが出来たくらいだった。

その瞬間、辺りにパアツと光が溢れた。

思わず上を見ると、さっきまでモローたちの頭上に居座っていた雲が割れ、丁度モローたちの頭上に降りかかったようだった。

突然の光の中で、輪郭を失いかける花。だが、次の瞬間には、光に負けまいとその桃色の花びらを誇る花。まるでヨーロッパの貴婦人のように気高く己を顕示しているのに、なぜか嫌味は感じなかった。むしろ……。

モローの口から、植物学者として言うてはならない言葉が出た。

「美しい」

あくまでモローは、研究者である。研究者というものは、己の研究物に特定の思い入れを加えるものではない。だが、そんな研究者としての矜持を融解させてしまうほど、その花には“熱”があった。そして、何者にも干渉されない、美があった。

「なんでしよう、この花」

「不思議だな。どれ」

ブラウンは、突然背後からかなり大きな道具を持ち出してきた。

三脚や四角い箱、そしてレンズ……。

「もしや、お前」ウィリアムズは信じられない、と言いたげな表情を浮かべた。「まさか、こんなところに写真機を持ってきたのか！」

「おうよ。当たり前前だろ？」ブラウンはニシシシと笑った。「アメリカに帰ってから、これを物好きに売れば大儲けが出来るからな」

うつぶきつつ、てきはきと三脚を立て、その上に写真機を載せる  
ブラウンに、ハイネも呆れ声で応じた。

「まったく、金儲けが目的ですか？ それに、どうやってそんな大  
荷物を運んできたんですか」

「へへへ、甘いな、ハイネ」荷物から取り出した銅板をウエスで磨  
きながら、ブラウンは続ける。「俺はよ、金儲けのためにここに  
いるんだぜ？ それに、金儲けのためなら大荷物もエンヤコラだ」

いや、ハイネが訊いているのはそういうことではない。「大荷物  
を運んできたこと」にハイネが驚いているわけではなく、“大荷物  
を、誰にも分らないように運んできたこと”に驚いているのに。

そんな、ここにいるほぼ全員の疑問をよそに、ブラウンは叫んだ。  
「おい、写真を撮るぞ！ 皆、その花の横に並べ！」  
言われるがまま、ブラウンを除く4人が、花の横に並ばされた。

まるで、花を囲むように、四人が並ぶ。サカモトだけは、何をする  
のか判らない、といった表情を見せている。それはそうだろう、き  
つと、この国には写真機などあるまいし、あつたとしても上流階級  
の奢侈品として消費されているに違いない。

「おい、撮るぞ！」ブラウンは言った。「2分間、動くんじゃね  
えぞ！」

当時の写真機は、まだ感光が鈍かった。発明当時のものと比べれ  
ばマシなもの（なんと、1時間！）、だがこの時代でも、ブラ  
ウンの言うように2分はかかった。その間、一切動いてはいけな  
いのだ。

そして、写真機の絞りが開かれた。

「……」

「……」

皆、黙りこくっていた。不思議なもので、「動きを止める」と言  
われてしまうと、息まで潜めてしまう。結果、黙りこくることにな  
る。

だが、ここでアイツがやってくれたのだ。

「ハックション！！」

サカモトだった。最初は彼も場の空気を察して直立不動だったのだが、途中でくしゃみをこいてしまった。

なぜだろう、こういう「黙るべきシチュエーション」のとき、突然その静寂が壊されると、奇妙な面白みを感じるの。不謹慎だからだろうか。

「はっはっは！」

まず笑ったのは、モローだった。

「ぶっ」

口を手で抑えつつ、ハイネも噴き出した。

「クク」

控えめに、ウィリアムズが笑った。

「なな、なんだよ、お前ら！」

写真機を操作しているブラウンも、そう言いつつ肩が小刻みに震えていた。

その笑いの輪に圧倒されたのか、それとも己の失敗を棚上げしたいのか、サカモトも笑った。

「ハッハッハ！」

どこの国でも、笑うときの表情だけは変わらないのだな、とモロはふと思った。

そんなこんなで、二分間が経ってしまった。

そんな笑い声の中、不意にハイネがサカモトの前に立った。最初は皆、そのハイネの行動に疑問を差し挟まなかった。でも、ハイネの顔が普段の穏やかな笑顔とは似ても似つかない、悪魔のような険しい顔だったので、ブラウンもウィリアムズもその異変を感じ取り、視線をハイネに向ける。

ハイネは最初、サカモトの顔をぼおつと睨んでいた。まるで、不倶戴天の敵の顔を見たような顔をしていた。だが、やがてその強ばった表情が、まるで積み木が崩れるかのように崩れた。

サカモトは、明らかに困惑していた。いきなり外国人に睨まれ、

その後表情を崩されては、困惑くらいしかすることがないのだろう。  
やがて、ハイネの黒い瞳を湛えた両目から、涙が流れ落ちた。

## 【22】完結

「お、おい……」

ハイネの様子に驚いたのか、ブラウンがようやく声を発する。

そのブラウンの声を遮って、モローが続ける。

「どうした、ハイネ」

モローの言葉は、一瞬ハイネを震わせた。まるで、秋風に揺れる木のようなだった。

しばらくしてから、ハイネが口を開いた。

「……似ているんです」

「似ている？」

モローは話を先に促す。すると、ハイネは続けた。

「僕の、死んだ友人に」

その言葉を聞いた瞬間、モローは不意に剥製管理室で見た、顔を真っ黒に塗りたくられた男の肖像を思い出した。

ウィリアムズはサカモトの横に立ち、サカモトに異国の言葉で何事かを伝えている。きつと、サカモトにハイネの言葉を訳してやっているのだろう。きつと、困惑させたままでは可哀想だと彼なりに気を回したのだろう。

サカモトが、ウィリアムズに何事かを聞く。その言葉を、ウィリアムズが英語に訳す。

「おい、サカモトが、“その友人は、どんな友人だったんだ”と聞いているぞ」

するとハイネは弱々しい口調で答えた。

「僕が参加していた革命の、指導者だった人です」

「か、革命？」

その言葉に面食らったのは、ウィリアムズだけだった。きつと、ブラウンもハイネの事情を知っているのだろうし、モローも先日 of 騒動を知っているの、面食らうことはなかった。きつと、ブラウ

ンにしるモローにしる、ハイネが革命に身を投じていた過去を知ったときは斯くの如く他人の目に映ったのだらうな、と思うほど、ウイリアムズは明らかな狼狽を見せていた。

しかも、ウイリアムズは黙りこくってしまい、サカモトに言葉を訳そうとはしなかった。きつと、異国人に革命などという言葉伝えることを憚ったのだらう。

しかし、そのウイリアムズに、ハイネは言い放った。

「訳してください。ウイリアムズさん」

「し、しかし……」

「訳してください」

ハイネが、あまりに強い目で睨んでいたので、ウイリアムズはついに折れ、ハイネの言葉を日本の言葉に直し、サカモトに伝えた。

最初、サカモトは驚いた顔を見せた。目を見開き、ハイネの頭から足元までを品定めするように見下ろしていった。そして腕を組んでしまった。

腕を組んでどれほど経っただらうか、無言で佇むサカモトがウイリアムズに何事かを言った。その言葉を、ウイリアムズが代弁した。

「だとすれば、私はあなたの友人とは似ていない」だそうだ」

「どうして？」

ウイリアムズ越しに、会話を繰り広げるハイネとサカモト。サカモトは言った。

「私は、革命を起こすような人間ではない。革命という場面では、必ず人が死ぬ。その革命にどんな大義があっても、人が死んでしまつてはただの茶番だと私は思うからだ」

「でも、時代は変革を望みます！ 本人の意思とは関係なく！ あなたがどんなに“革命が茶番”だと言ったところで、時代は聞いてくれない！ ……僕の死んだ友人もそうでした。彼だって、とても革命なんて大それたことをしでかすようなヤツじゃありませんでしたよ！」

怒鳴るハイネに、サカモトは、ニコツと笑って応じた。まるで、

凡愚の戯言を許して佇む、聖母のような笑顔だった。

「そうかもしれない。私だって、ひとかどの士だ。国を憂う気持ちはある。その気持ちが発しないとは限らない。そして、時代に流されてしまいかも知れない。もしかしたら将来、革命を志向することになるかもしれない。だが、そのときは……。誰も血を流さない革命を目指そう」

“誰も血を流さない革命”という言葉に、ハイネは笑った。ハハハ、と力なく。

「あなたが言うのは綺麗事ですよ。でも」

ハイネはまた、両目から涙を流した。

「本当に、サカモトは死んだ友人によく似てる……。綺麗事なのに、どうしてこんなに心に突き刺さるんだろう。あなたの言葉も、アイツの言葉も」

さめざめと、ハイネは泣いた。そして、地面に両膝をついた。

そのハイネの肩を、サカモトが抱きしめた。

ハイネは子供ののように泣きじゃくった。

「なあ、ウィリアムズ」

海風が、モローの頬を撫でた。その風がそのままウィリアムズのフロックコートを揺らし、ハイネの髪の毛を揺らした。そして、その風は海の向こうに行ってしまった。

「なんだ、モロー君」

甲板の手すりに身を預けながら陸の方を眺めるモローに、ウィリアムズは訊く。モローの眼前で、さっきまで探検していた“日本”が、真っ赤に染まっていた。

「そういえば」陸の方から目を離さずに、モローは言った。「結局、あんまり探検できなかったな」

「そうだな」

ウィリアムズも頷いた。

結局、ハイネとサカモトの問答の後、ハイネがずっと泣き続け、

それをサカモトが宥め続けた。子供のようにワンワン泣いたハイネは、何時間も何時間もまるで数年分の涙を全てひねり出したかのようになり泣き続け、サカモトはそのハイネを延々宥め続けた。結局、ハイネが泣き止んだころには、船に戻る刻限になっていた。おかげで本来の目的である動植物の収集がならなかったのである。

「スイマセン。でも」甲板に佇むハイネは言った。何時間前に泣き続けた面影は、もはや腫れた目にしか残っていなかった。「サカモトに会えた。それだけでも、凄い収穫だったように思えます。……」

「そうだな」

モローもウィリアムズも、心から頷いた。

「でも、これから、どうなるんでしょうか」

と、ハイネは二人に訊く。

「何がだ」と、ウィリアムズ。

「決まっていますでしょう」ハイネは続けた。「これから、この国はどうなるのでしょうか」

「さあね」

ウィリアムズは両手を天秤のように掲げ、かぶりを振った。

「さあね、つて!？」

「いいか、私はあくまで通訳だ。アメリカの政治家でもなければ、向こうの権力者でもない。無論、人智を越えた存在でもない。つまるところ、ほとんど一般人同然だ。だから、一般論しか言うことができない。これから何十年先までは見通すことはできない。そういう意味での”さあね”だ。だが、少しなら分かるぞ」と、ウィリアムズは前置きして続ける。「どっちにしろ、アメリカと日本は通商を結ぶことになるだろう。そして、他の列強とも通商を結ぶことになるぞ」

「それからは？」

ハイネの言葉に、ウィリアムズは短く答えた。

「さあね」

「そこから、“さあね”なんですか！ 早いですよ！」

「私を買いかぶり過ぎというものだろう。通商を結んでから、その国がどうなるかは分からない。判るわけもない。もしかしたら、インドのように列強の資本主義に組み込まれてしまいかもしれない。清国のように列強に対して戦を構えて国運を傾けてしまいかも知れん。だが」

「だが？」

「どちらにせよ、いい方向には動かないだろうな」と、ウィリアムズは平然と続ける。「何せ、二世紀も前から他の国との衝突を避けてきたような国だぞ？ つまり、二世紀も涼風の中にあつたような国だ。列強の暴風に翻弄されて、滅ぶ公算が高いだろうな」

「そうですか」伏せがちだった強い視線を、陸に向けたハイネは続ける。「でも、信じたいものです。この国の息災を。この国の人々の幸せを。間違つても、戦争なんて起こしてもらいたくありません」

しばし、沈黙。風だけが、沈黙の間を吹きぬけた。

あえて、モローは沈黙を壊した。

「……そうだな」

そう言つて、真つ直ぐな瞳を陸に向けるハイネに、淡く微笑みかけた。

「信じようじゃないか。この国の人々を」

正直なところ、モローは日本人なるものを知らない。見知っているのは、ただ一人サカモトだけだ。だが、サカモトが平均的な日本人の姿ならば、もしかすると日本という国は列強の暴風を潜り抜けるのではないか、そんな予感もした。

そんな心地よい余韻も、突然に碎かれた。

「おーい！」

騒々しい声と共に、甲板に躍り上がってきたのはブラウンだった。

「どうした？」

「さっきの写真、現像できたんだが……」

そう呟きつつ、ブラウンは写真をさっと差し出した。

その写真の中には、ピンク色の花が咲いていた。もちろん当時は白黒写真だから、その花の鮮やかなようで淡いピンクはそもそも映ってはいなかったが。ただ、それ以上に印象的なことに、その花の前に立っていたはずの四人の姿がまるで見られなかったことである。「あれ？ 僕たちが映っていないですね」

写真を覗き込みつつ、ハイネがつまらなそうに呟く。ブラウンは、当たり前だろ、と言わんばかりにため息をついた。

「あのな。あの写真は、感光に2分かかるんだ。……言っていることの意味がわかるよな？」

「いやあ……、よく分かりませんが」

「感光する前にお前たちが動くもんだから、お前たちの姿がほとんど映らなかったんだよ！」

なぜか、ブラウンはぷりぷりと怒っていた。

そのブラウンを宥めるように、モローは写真を眺めながら言った。

「だが、きれいな花だな」

「あ？ ……ああ」

「そういえば」と、写真に向けていた目を、ウィリアムズに向けるモロー。「ウィリアムズ、この花、なんていう名前なんだ？」

その質問に一瞬戸惑った様子のウィリアムズだったが、その顔色を一瞬で納めてモローの質問に応じる。

「ななな、何の話だね？」

心なしか、声が震えている。やはりな、とモローはにやりと笑う。「既に聞いているんだろう？ ウィリアムズ。サカモトから」

「むむむ……」

視線で押される格好になったウィリアムズは、あがあがと顎を動かす。まるで、子供の悪戯を咎めるかのようなモローの視線に、ついにウィリアムズは正直に告白した。

「“ sakra ” というらしい」

「“ sakra ” ?」

「サカモトが言うには、“ 花 ” と聞けばその“ sakra ” を指す

くらい、日本人に馴染みの深い花のようだ。どうやら、20日程度しか咲かない、寿命の短い花らしい」

モローは、自分の部屋に戻った。

今日は色々ありすぎて疲れた。寝よう。本来なら、部屋に入ってから日記を書くのが習慣のモローだったが、今日はもういいだろうと怠け心に襲われたモローは、ベッドに入ろうとした。だが、背中に妙な視線を感じたので、その動作をとりあえず抑え、辺りを見渡した。

その部屋の中には、何もいなかった。いつも通り、分厚い本が積み重なって出来た山や、衣類の山があるだけだった。気のせいか、と思い、またベッドに視線を戻した瞬間、ようやく部屋の異変に気づいた。

異変があつたのは、部屋ではなかった。部屋の隅に置かれていた、ウォードの箱だった。いや、もっと端的に言えば、ウォードの箱の内部だった。

箱の中には、例の正体不明な植物が体を横たえていた。

だが、その植物の根元から、新たな芽が吹いていた。そう、件の植物は死んでいなかった。ただ、開かれてしまった環境に合わせ、その葉を変容させたのである。

思わずモローは、ウォードの箱の前にまで近寄った。

よく観察すると、その箱の中に咲いていた芽は、シダ植物のそれだった。あの、正体不明の植物のものとはとても思えないほどに、その植物は忠実にシダのそれを辿っている。そのシダ植物は、新種のそれには違いなかった。だが、あの正体不明の植物に抱いた感情ほどには、眼の前の新芽には心が動かされなかった。

その、新種のシダを前に、モローはただ立ち尽くした。

気づけば、頬に何か伝うものを感じたモローは、頬を拭った。そして、戸惑った。どうして俺は、どうして俺は、泣いているのだろう？

新芽はもはや、モローに何も語りかけてはこなかった。

これから1ヶ月間、日本側とアメリカ側の協議は繰り返された。一進一退かと思われた協議だったが、ペリー艦隊に恐れをなしたのか、結局日本側が折れる形で条約が成った。所謂、「日米和親条約」である。

この条約、アメリカにとっては「捕鯨船の停泊基地が出来た」程度の意味しか持たない条約であったが、結ばされた日本からしたら大事件だった。なにせ、2世紀もの間ほとんどの国と交流をしてこなかったのだ。結局、このあと結ばされた通商条約と相まって、日本は経済や政治・生活に至るまで、西洋列強から吹き付けてきた大嵐が吹き荒れた。

その大嵐の中で、日本がようやく曲りなりにも近代国家を作り出すに至るまでの十年間。そのわずか十年には、その嵐のすさまじさを物語るかのように、固有の名前がついている。

それが、“幕末”。

幕末が、ここより始まったのだ。

さて、最後にあの4人のアメリカ人の顛末について語ろう。

ウィリアムズは日本開国後、また清国に宣教師兼通訳・且つ新聞編集者として腰を落ち着け、そこで、かねてより進めていた、清国引いては中華文化の研究を行なった。植物収集が趣味であった彼らしいことに、彼が晩年に著した『中国総論』では、一章を割いて清国の動植物や産する鉱石等の状況、つまりは「博物学」にその紙幅が充てられていた。無論、国を「総論」する本なのだから当然と言えば当然かもしれないが、一方であるウィリアムズらしいとも思える。

ハイネとブラウンは、前者が絵描き、後者が写真技師ということもあり、二者の絵や写真がペリー艦隊の公式報告書に使われたことで、歴史に名が残った。しかし、彼らが描いたり撮ったりしたもの

の多くは、歴史の大渦に飲まれ、もはやほとんど散逸してしまっている。桜を撮ったブラウンの写真も、何処にあるのか杳として知れない。

モローは、この日本遠征により、数種の新種を発見したことで植物学にその名を残した。

ただ、ここで面白い事実がある。

モローが“発見”した新種の中に、シダ植物が存在しないのである。

一方で、ウィリアムズはシダ植物の新種を発見している。しかも彼の日記によれば、サカモトと会ったその日に、である。

あくまで想像であるが、と断っておくが、モローはウィリアムズに、ウオードの箱を返したのではあるまいか。そして、その箱の中にあつた「新種」を、ウィリアムズに譲った。そしてそれを自分の発見であるとばかりに、ウィリアムズが発表したのではあるまいか。もちろん、この想像が正しかったとしても、ウィリアムズの人格を問われるようなものではない。何せ、そもそもその植物を発見したのは他ならぬウィリアムズなのだ。そもそも、モローが“発見者”を名乗ってはいけない筋のものだったのである。

むしろ疑問なのは、どうしてモローがウィリアムズにあえてウオードの箱を返したのか……、である。しらばくれていれば、新種の発見者としての名誉が転がり込んでくるにも関わらず、である。

無論、この問いは、ナンセンスな問いである。

何せこの問いに答えるべき人物は、土の下にて何者にも干渉されない、絶対的な眠りに就いているのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5332f/>

---

ワードの箱～黒船異聞～

2010年10月8日14時18分発行